

長門山根秋里謹著

生徒
必讀

大祭祝日祝詞

附祭日祝文
開校式卒業式祝文

大阪 國書出版會社藏版

大祭祝日説明序

禮に五經あり祭より重きはなし、祭の物たる大なり、其人倫世道に關する細故にあらず、語に曰く祭者教之本也と、祭事の義を説く者最も恭謹莊敬ならざるべからざるなり、頃日者畏友山根秋里君祝日大祭日の由來を衍釋叙述し加ふるに之が祝文を以てし名けて大祭祝日説明と云ふ、其義を解するや恭謹莊敬妄りに臆見の言を以てせざ、蓋し坦明の説を以て初學の徒をして之を讀て即ち其義を了せしめんと欲するに在り、其祝文に至ては或

は純駁同じからざるものなきにあらずと雖も而も能く祝文體を守て失はざ其國家の大儀を明にし忠君愛國の志氣を發揚するに於て補益する所尠少ならざるべし

明治二十五年五月

細見信太郎 撰

緒言

一 小學校に於ける祝日大祭日の儀式は本年四月一日より執行せらるべきを以て即ち此書の必要に迫り町噲親切に著述したる者にして小學校生徒の必携に供したるものなり

一 本書は明治二十三年十月六日勅令第二百十五号を以て公布せられたる小學校令第十五條より基き祝日大祭日の説明を爲したる者なれば小學校生徒ハ言ふまでもなく苟も我國に民たるものハ必だ一讀せざる可からざる緊要の書なり

一 本書にハ明治二十四年六月十七日文部省令第四号を以

て公布せられたる祝日大祭日の儀式に關する規定の小學生徒も亦心得置かざるべからざる事項とも記載したるなり

一本書にハ小學校に於ける祝日大祭日の儀式に關する規程に基づき生徒の奉祝すべき祝文數篇をも載せて參考に供したるなり

一本書にハ附記として學校開業式卒業式及び學藝競進會式場に於ける生徒の祝すべき祝文數篇をも亦載せて參考に供したるなり

明治二十五年五月
著者識す

生徒大祭祝日説明

附開校式卒業式祝文

目次

大祭祝日	一	四方拜	五
元始	九	孝明天皇祭	一一
紀元節	一四	春季皇靈祭	一七
神武天皇祭	二〇	秋季皇靈祭	二三
神嘗祭	二四	天長節	二六
新嘗祭	三〇	大祭日儀式規程	三三
祝文認め書式	三九	新年拜賀式祝詞	四〇

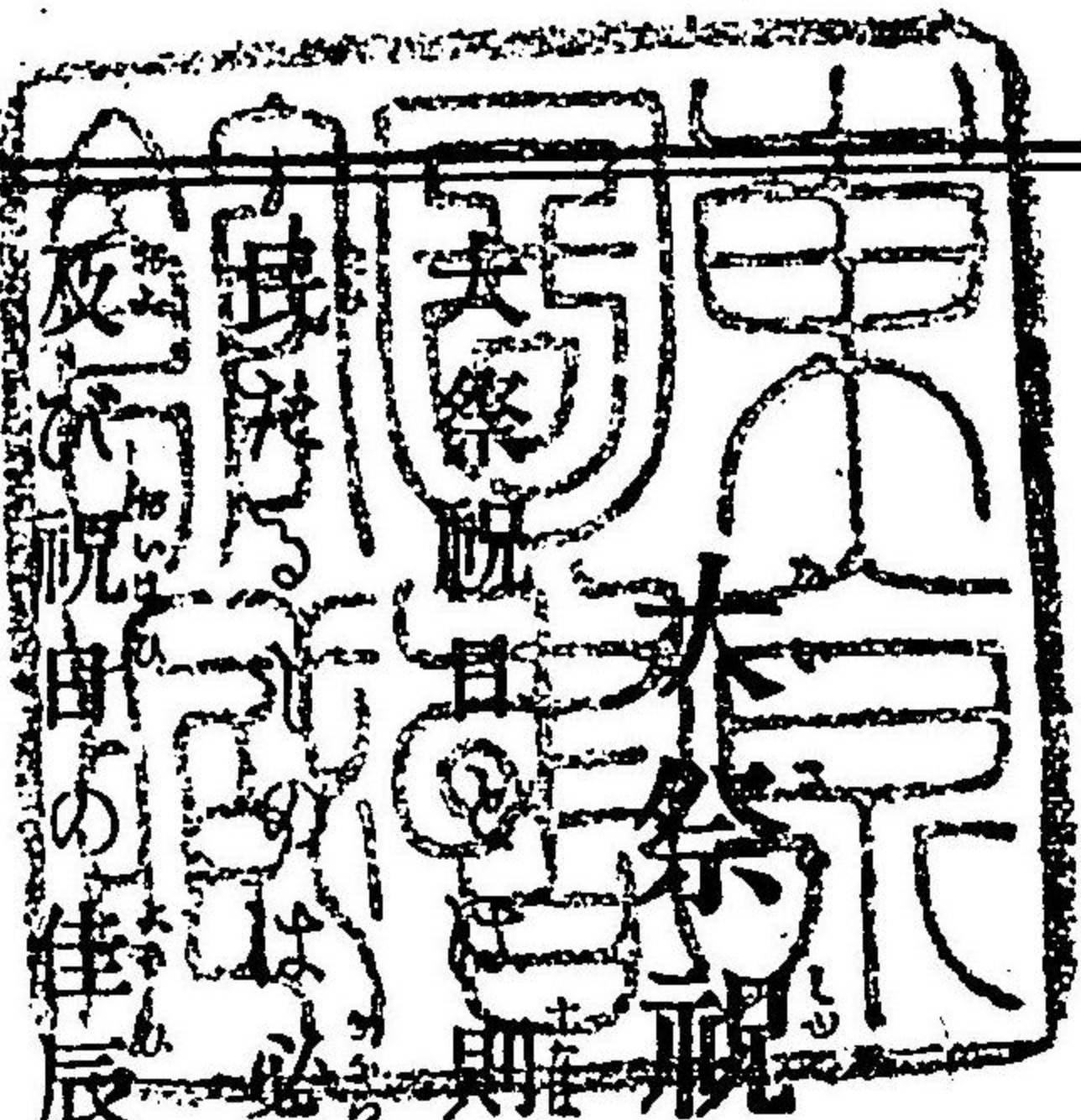
紀元節祝詞	五三	天長節祝詞	六四
元始祭祝詞	七六	神嘗祭祝詞	八五
新嘗祭祝詞	八五	學校開業式祝詞	九一
生徒進級式祝詞	一〇二	女學校開業式祝詞	九八
生徒卒業式祝詞	一〇八	學藝獎勵會祝詞	一一七

目次終

生徒大祭祝日説明

附開校式卒業式祝文

長門 山根秋里謹著



祝日

ち國祭國祝の日にして我れ等日本帝國の
 民々各皆職業
 す祝意を表せざる可からざる國家の祭典
 此日は舉國數千萬の民々各皆職業
 を休み日章旗を檐頭に掲げて相歡樂して盛に當日を祝す
 るなり左れば予は今この國祭國祝の日には何故に斯く祝

せざる可からざるやを説明せんとす今それ此に人ありて
汝は誰が養育に依て成長し誰が慈恵に依て飢寒を感ぜざ
るやと問ふ者あらば必ずや十人が十人我が恩愛なる慈父
慈母の庇蔭なりと答ふるは今更言ふを俟たざるべし況て
や其幼稚にして未だ歩行と言語の自由ならざる昔日より
許多の費用を擲ち其日々學校へ通はせらるゝ今日に至る
の間にては父母は其子の爲には幾等の勞苦を爲し幾等の
艱難を経たるや擧げて數ふべからざるをや實に父なれば
こそ母なればこそ豈誰か故あうして汝に衣食せしめ汝を
撫育する此の如き者あらんや乃ち此山よりも高く海より

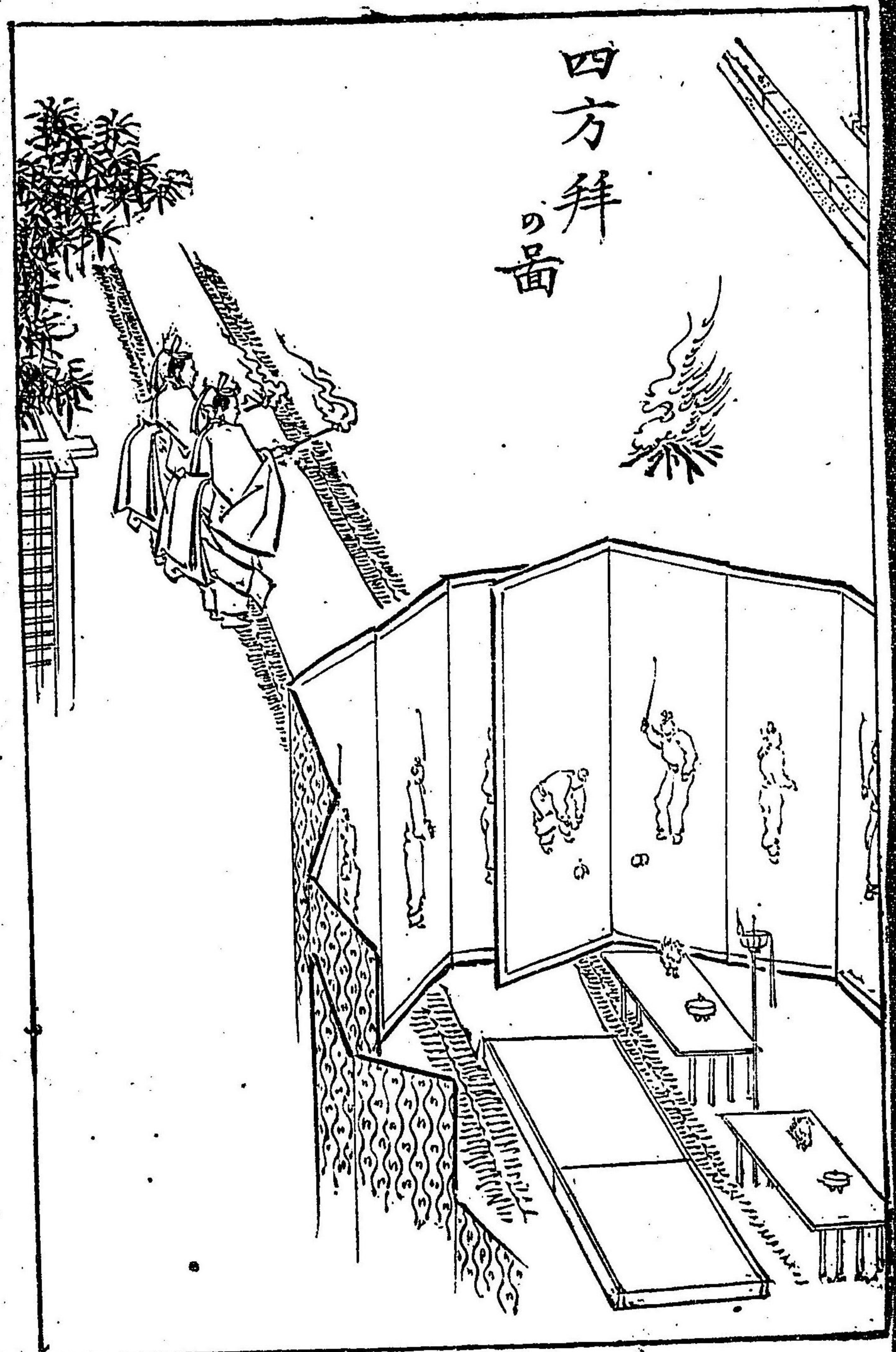
も深き鴻恩を膺へる父母に對しては孝道具よ盡し其生と
死とに論なく心力を竭して慈育の恩顧に答ふるは是れ人
子たる者の常道にして實に天下の大倫なり左れば世人が
父母の喪には悲歎し其忌日よは吊祭するも只之が爲のみ
然して此感情ハ啻に父母のみに對して然るにあらず親戚
知人其他何人に限らば恩顧を受けてハ之に報答するは實
に當然の事にして其國家皇室に於ける亦然るべきこと素
より論を俟たざるなり即ち我等父母兄妹を始とし海内四
千万の同胞の夙に起き夜ハに寝ぬ商賣を勵み職業を勉め
食足り衣供はりて家睦じく親戚知人と相團欒し相往來し

信義以て交り友愛以て親み代泰く時平るにして如何に亂
暴の人ありとて如何に兇惡の者ありとて懼るゝも足ら
ず憂ふるにも足らず氣平かに心安く其無事平穩に渡世し
得るものは是れ實に誰が庇蔭ぞや伏て惟みるに萬國無比に
して國土民物安定の基を開き給ひ一統繼承の上に立せ給
へる我が皇祖皇宗及び御歴代天皇陛下の德澤に依て然る
ものなれば我等日本帝國の民たるものえ猶子女が父母に
孝順の道を盡すが如く我が國家皇室に對し奉りて忠良の
道を盡すも是れ人の人たる彝倫よして實に臣民たるもの
の大義本分なり左れば我國に民たる者常に其聖恩の優渥

なるを思ひて其國家皇室に大關係ある祝日大祭日には各
自心を盡し意を誠にし敬肅以て祝意を表するは實に當然
の次第にして是れ即ち國家に忠する所以の道なり左れば
我が文部大臣よりも昨年六月特に祝日大祭日に關せる小
學校に於ける儀式をも規定せられたる事なれば予ハ今左
に國祭國祝の事由を解説して苟も我國に民たる者は必
祝せざる可からざる所以を明かにせんとす

一月一日

四方拜



四方拜
の畧

四方拜とは此日拂曉天皇親ら祭服を召させ給ひて神嘉殿の南庭に設けたる御座に出御ましまし四方に向ハせ給ひて皇太神宮を始め神武天皇の陵孝明天皇の陵等其他天神地祇を拜し給へる御式にして御式了りて後親王及び諸臣よりの朝賀を受けさせ給へると申す

謹按ずるに紀元一千五百五十年宇多天皇の寛平二年正月朔四方拜の御事あり四方拜蓋し此に始まりしならん

〔一〕説寛平元年弘其後延喜以來永く常式となりて後世まで改められざ行はせ給ひしが明治の初年に至り古禮を参酌御改定あらせられて前に記せる如く皇太神宮を始め

め凡て我國土民物に功德ある諸神を拜せらるゝ事とな
れりさて皇太神宮と申すは天祖天照大神を奉祀せる伊
勢國の神廟にして實に我國開闢の祖神にましまし神武
天皇より今上天皇に至る御歴代天皇を皆是れ此天祖の
神裔にぞましますなり次は神武天皇と申すは則ち未だ
一統せざる天下を御靜定あらせられて始めて都を大和
國に定めさせ給ひ天皇の御座に即位ましませし皇宗に
して即ち我天皇の御遠祖まします而して孝明天皇と
申すに實に我今上陛下の御父君ましますなりさて又
天神地祇と申すは我皇祖皇宗を輔翼し奉りて勳功あり

又は我國土民物を安じ定められて功德ある神々を申す
なり而して神嘉殿と申すは皇城内に作らせ給ふ所の賢
所皇靈殿八神殿の三字の神殿の側に立てさせ給ひて恒
例又ハ臨時の御祭典を行えせらるゝ所よして賢所とは
天祖の當に吾を視るが如くなるべしと祝給ひたる三種
の神寶の一なる御鏡を崇神天皇の御時よ同床共殿は不
敬との御聖意にて伊勢國に奉祀あらせられ其模造まし
ませし御鏡を近く内裡に祭らせ給へる所にして其崇敬
あらせらるゝ所伊勢に於けると少しも異なる事なきなり
而して皇靈殿と申すは御歷代天皇の御靈を祭祀し給へ

る所よして八神殿と申すは我皇祖皇宗の大業を裨輔あ
らせられし神々を祭祀せられし所にして即ち神御産日
神高御産日神玉積産日神生産日神足産日神大宮賣神御
食津神事代主神の八神を重く祭らせらるゝ所なり

一月三日

元始祭

元始祭とは年の元始に天皇親ら賢所及び天神地祇歷世諸
帝を祭らせ給ひて寶祚の本始を祝したまへる御式なり即
ち皇城内に作らせ給ふ所の賢所皇靈殿八神殿を祭らせ給

へるものよしして皇太子及び皇太后皇后陛下より御拜あら
せられ群臣より参拜せしめらるゝと申す
謹按ぶるに明治三年一月三日天皇神祇官に幸せられて
天神地祇官八神殿歴世諸帝を祭らせ給へり元始祭典蓋
し此に始まる同五年始めて稱して元始祭と云ふ然れと
も此事古へも毎月一日に賢所即ちもと内侍所の御供へ
あり又伊勢の内宮外宮等にも年始めの御祭りはありし
次第なれば明治の初年此に之を起されて年々の御式と
はなりしものなり而して爰に賢所と申すは前にも記せ
し如く天祖の此鏡は専ら我御魂となして吾前に拜する

如くいつきまつれと宣給ひたる所の寶鏡を奉安せる所
にして即ち此御鏡を以て天祖の御體と仰ぎ奉らして最
も之を崇敬し給ふなり然り而して我國土民物の生育は
悉く皆此天祖の恩澤によりて育成したるものなれば乃
ち元始祭の御祭典ありて其本元に報い奉られ之を萬世
無窮に傳へさせ給はれとのありがたき御聖意なれば國
民たる者亦其聖恩の優渥なるを感佩して國運の益々天
地と限りなあらんとを祝せざる可からざるなり

一月三十日

孝明天皇祭

孝明天皇祭とは我今上天皇陛下の御父君を祀らせらるゝ
 日にして即ち皇考孝明天皇陛下の御忌日に當るを以て此
 日は天皇親ら御祭祀あらせられ又勅使を山陵に差遣せら
 れて幣帛を奉らしめ大孝を申べたまふ
 謹按ざるに孝明天皇と申すは御名を統仁と申し仁孝天
 皇第四の皇子にましまして天保二年六月十四日を以て
 御降誕あらせられ御年十六にして御踐祚御在位實に二
 十有一年にして慶應二年十二月二十五日を以て御登遐
 あらせらる御年三十七今京都府山城國愛宕郡後月輪東
 山陵に葬祀あらせられ謚して孝明天皇と申し奉る明治

元年令して特々先帝の祀典を重ぜられ同五年今曆頒布
 あるや更めて一月三十日を以て崩御の日と爲らる惟み
 るに皇宗神武天皇より百二十一代の御宇に臨ませられ
 當時徳川幕府の失政多くして人心安からず内に勤王義
 士の所々に計圖するあり外に海外諸國の示威請求する
 あり内憂外患並び起るの時に在りて深く國家の安危人
 民の休戚に大御心を勞し給ひまばし御親勅あらせら
 れて終に七百余年來皇家の御衰へしとも人民の壓抑の
 下に立ちしとも古へに稀なる文明の大御代たる明治中
 興の原を開かせ給ひたる御聖主にましませば其御徳業

のありがたきぞ音に感佩し奉らんも中々たろかなると
なるべし

二月十一日

紀元節

紀元節とは皇宗神武天皇元年辛酉正月庚辰朔大和國橿原
宮に於て御即位の禮を擧げさせられ此に始めて天壤と窮
りなきの皇基を恢弘し給ひし日にして此日は天皇親ら皇
宗皇帝を御祭祀あらせられ皇太子及び皇太后宮皇后宮に
も御拜あらせられて普く海内をして祝典を遵行せしめた

まふ

謹按するに明治五年今曆を頒布せらるゝや御即位當年
を以て紀元元年とせられ二月十一日を以て御即位當日
とせらる稱して紀元節と云ふ今を距る實に二千五百五
十二年あり惟みるに上古天祖の御代には西國稍開けた
りと雖ども東方皇德に化せざるもの往々良民を困しめ
浮兇の徒のみ多かりしかば皇宗神武天皇西州より中國
を經大倭國よ向ハせ給ひて所在の兇徒を服従し給ひ茲
に皇都を大和橿原に建てさせたまふ今に至る傳へて百
二十余世年を経る二千五百余年の多きに至り其間治亂

興廢の事なきにあらざると雖とも常に皇家の尊嚴を保ちて皇統連綿として外邦諸州絶て比倫なく實に我國の名譽とし世界に誇張するに余りある所よしして我等臣民の今日よ至る無事安穩に渡世し得るもの偏に皇恩の徳澤によりて然るものなれば苟くも我國に民たる者其大義名分のある所を明かにして國家ハ人民の國家にあらざ實に皇家の國家なる事を心得て一旦緩急あらざ心力を盡し其身を捨て、皇運の向後猶幾万年の無疆に傳へさせ奉らんとを肝銘して苟且にも皇恩を疎畧よし卑屈なる振舞ある可からざるなり

三月二十一日

春季皇靈祭

春季皇靈祭とは天皇親ら歴世諸帝の皇靈を祭らせ給へる御式にして此日は皇太子及び皇太后宮皇后宮にも亦御拜あらせらる蓋し春分秋分の二季は年の内にて晝夜平分の時なれば殊に秋季皇靈祭と均しく此二節を以て御祭祀あらせられて大孝を申べたまふ是れ明治の新興なり謹按ざるに我歴代天皇陛下の此國土民物を天祖より受けさせ給ひて天津日嗣の大御位を繼がせたまひ世々よ

君とし臨ませらるゝや民安く國泰くして其天徳に副は
 せ給はんとして常に大御心を盡させられて益々此天業を
 恢弘したまひ代を經る一百余世の多きの今日に至るま
 で而も國此の如く小く地此の如く狭きにも似ぞ屹然東
 海の表に輝々として未だ嘗て外邦の侮りを受けたると
 かきのみならず數々國威を四外に輝かせしこと擧げて
 數ふ可からず其二千余年の間乾坤位正しく民其分を守
 り各其祖業をつとめ無事安泰にして渡世し來りたるも
 の是れ實に我が皇祖皇宗の國を立て徳を樹てたまひし
 遺澤に依ると言ふと雖も抑亦歴世皇帝の叡明仁武にま

しまして天祖よりうけさせ給ひたる治國安民の大御業
 よ日夜御心を盡させたまひし御徳功と其臣民の亦皇徳
 のありがたきに感佩し奉りて一身をも顧みず能く義勇
 忠節を守りて其國家皇室に盡したる所とに因らばんハ
 あらば左れば我が今上天皇陛下の特に此祭典を始め
 せ給ひたるも皆是れ御歴代聖主の深く此國此民の爲に
 大御心を盡させたまひし洪大なる御恩徳に報い給はん
 との御聖意よして實に億兆の皇祖皇孫に報い奉るべき
 誠の心をも兼ねさせ給ひてかく春季秋季の二節を以て
 御祭祀あらせらるゝ次第なれば苟も我國に民たる者は

其聖意のありがたきを奉体し我國体の他邦と特異なる
 所を深く思ひ以て國の爲家の爲安泰和平に向後億万年
 の久しき天地日月と共に皇運の益々榮へ奉らんとを思
 ふべきなり是れ實に我が祖先に報ひ我が子孫の安泰を
 はかす所以なり

四月三日

神武天皇祭

神武天皇祭とは御遠祖神武天皇陛下を祭らせらるゝ日に
 して實に我が此中國を御統一あらせられて始めて皇位に



即すなはちせたまひ治お國安民くわんみんの御德業ごとくごうを開ひらかせ給ひたる日に當あたれば此日このひハ天皇親みかどら御祭祀ごさいしあらせられ皇太子こうたいてい及び皇太后こうたいたいこうご宮皇后みやこうご宮にも御拜ごはいあらせらる又勅使ちくしを山陵みやまに差遣さしつかし幣帛へいぱくを奉たてまつらしめ大孝たいこうを申のべたまひ普あまく海内かいだいをして祭典さいてんを遵行そんこうせしめ給ふ是れ亦また明治めいしの新興しんこうなり

謹按あやするよ神武天皇かむむと申まうすハ天祖てんそ天照太神てんしょうたいじん五世ごせいの孫まごにましまして彦瀲武鸕ひこなるとひ鷺さぎ草葺くさむき不合尊あへそりの第四よんじ代皇子わうじ御名みかを若御毛わかみけ沼命ぬののみこと一いつに狹野尊さかののみこととも申まうす帝位みかどに即すなはちせ給ふに及およんで稱しやうして神日本かみよまと磐余彦いわれひこ火出ひで見天皇みかどと申まうす七十六年しじゅうろくにんねん三月甲午さつきのかつ朔甲辰ついでに檀原宮たんのらのみやに崩御はうごし給ふ今の奈良縣ならけん大和國やまとくに

高市郡畝傍山東北山陵に葬祀せらる追謚して神武天皇
と申し奉る明治五年今曆の頒布あるや四月三日を以て
崩日と爲らる惟みるに上古未だ中州の開けざるや人智
嚙味弱肉強食父子の親も之を盡すと能ハズ夫妻の愛も
之を全うすると能ハズ其生活や其境遇や亦言ふに堪へ
ざりし者ありしならん此時に當てや我皇祖皇孫ハ九國
を治しめし給ひしが其東方諸國の未だ皇徳に澤はざる
を慨せられて遂に皇宗神武天皇は大に干戈舟楫を修め
させられ中國を経て此難波に入らせたまひ數年にして
悉く兇賊を平げ皇都と大和國橿原に定めさせられて爰

に始めて治國安民の大御業を開かせられ傳へて一百余
世の今日に至らせ給ふまで一統繼承億兆又安亦離散殘
害の何者たるを知らざるもの實に我皇宗陛下の御徳業
に因て然らざるはなしされば我が聖上も特に御祭典あ
らせらるゝ次第なれば苟も國民たるもの深く皇恩のあ
りがたきを感佩し奉りて盛に當日の祭典を舉行し且身
を修め業を勤めて常に此恩澤を報せんとを忘るべから
ず

九月二十三日

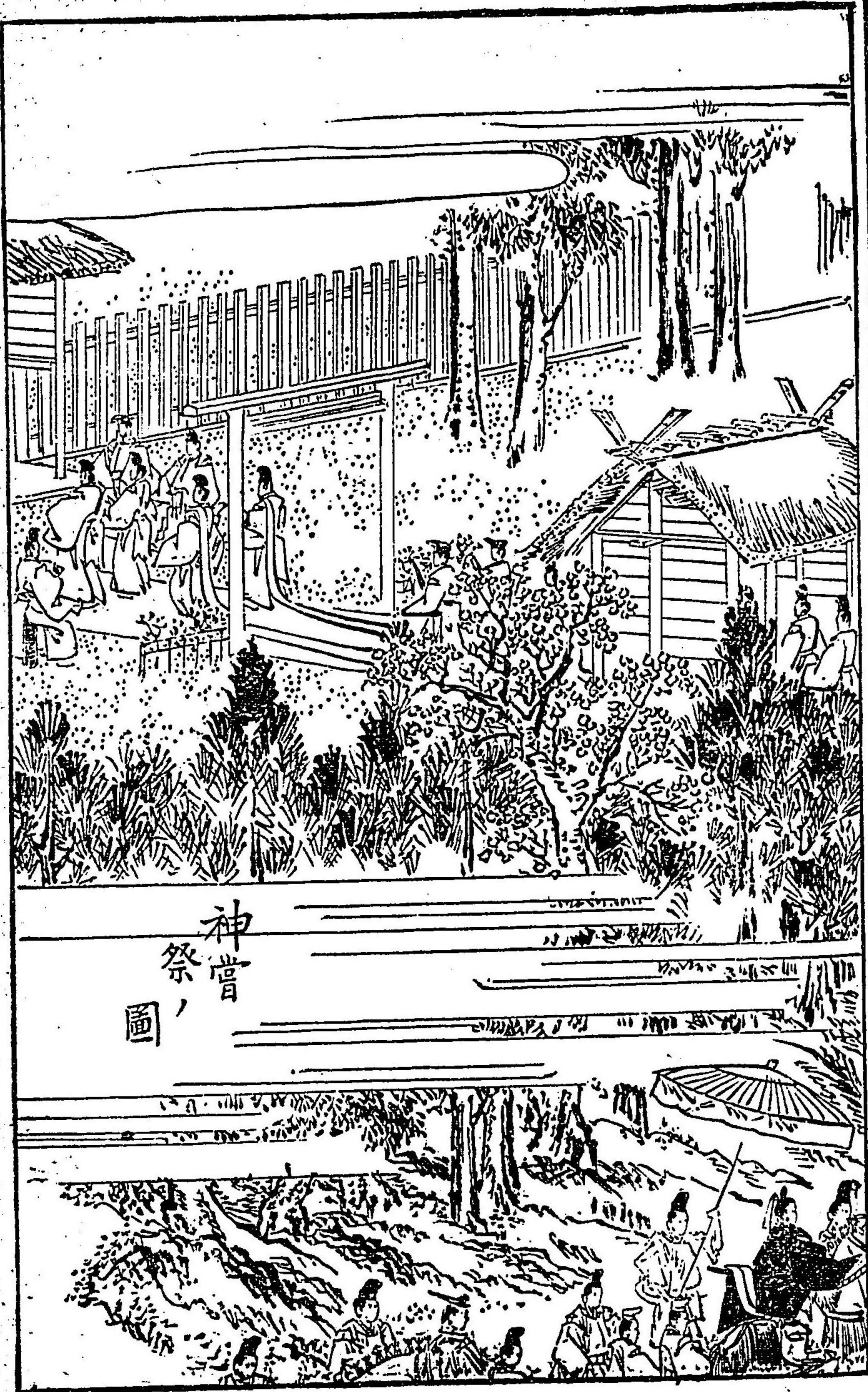
秋季皇靈祭

秋季皇靈祭は其御祭例一々春季皇靈祭に同じ

十月十七日

神嘗祭

神嘗祭とは當年の新穀を伊勢神宮に供進あらせらるゝ御式にして即ち皇太神宮の大祭祀なり此日ハ天皇親ら天祖天照大神を祭らせられ神宮を御遙拜したまふ尋て皇太子及び皇太后宮皇后宮にも御遙拜あらせらるゝ又勅使を神宮に差遣して幣帛を奉らしめ給ふ明治五年今曆の頒希あるや始めて海内として祭典を遵行せしめたまふ



神嘗祭ノ圖

謹按するに舊制九月十七日を以て當日となす明治十五年更めて十月十七日と爲らる其儀十一月の新嘗祭に同じければ下文新嘗祭の條を併せ見るべしさて其年の新穀を皇太神宮に供せらるゝとハ上古天祖の万民をして此嘉穀を播殖せしめ給ひ以て平素の常食と定めさせられてより此より始めて保生の安きを得亦飢餓の患ひを免かれて太平無事に渡世するを得たるとなれば其洪大なる御恩を感謝あらせられて億兆よりも報謝し奉る誠の心をも併せられて毎年其新穀を先づ神前より饗祭せさせ給ふ御事なれば國民たるもの其神恩のありがたきを肝

銘し譬へ其の粒々の微と雖ども妄りに之を粗忽にせず能く其本を思ひ今の安泰を思ひて益々事に勵み業に勉め常にその鴻恩に報答し奉らんことを忘るべからざるなり

十一月三日

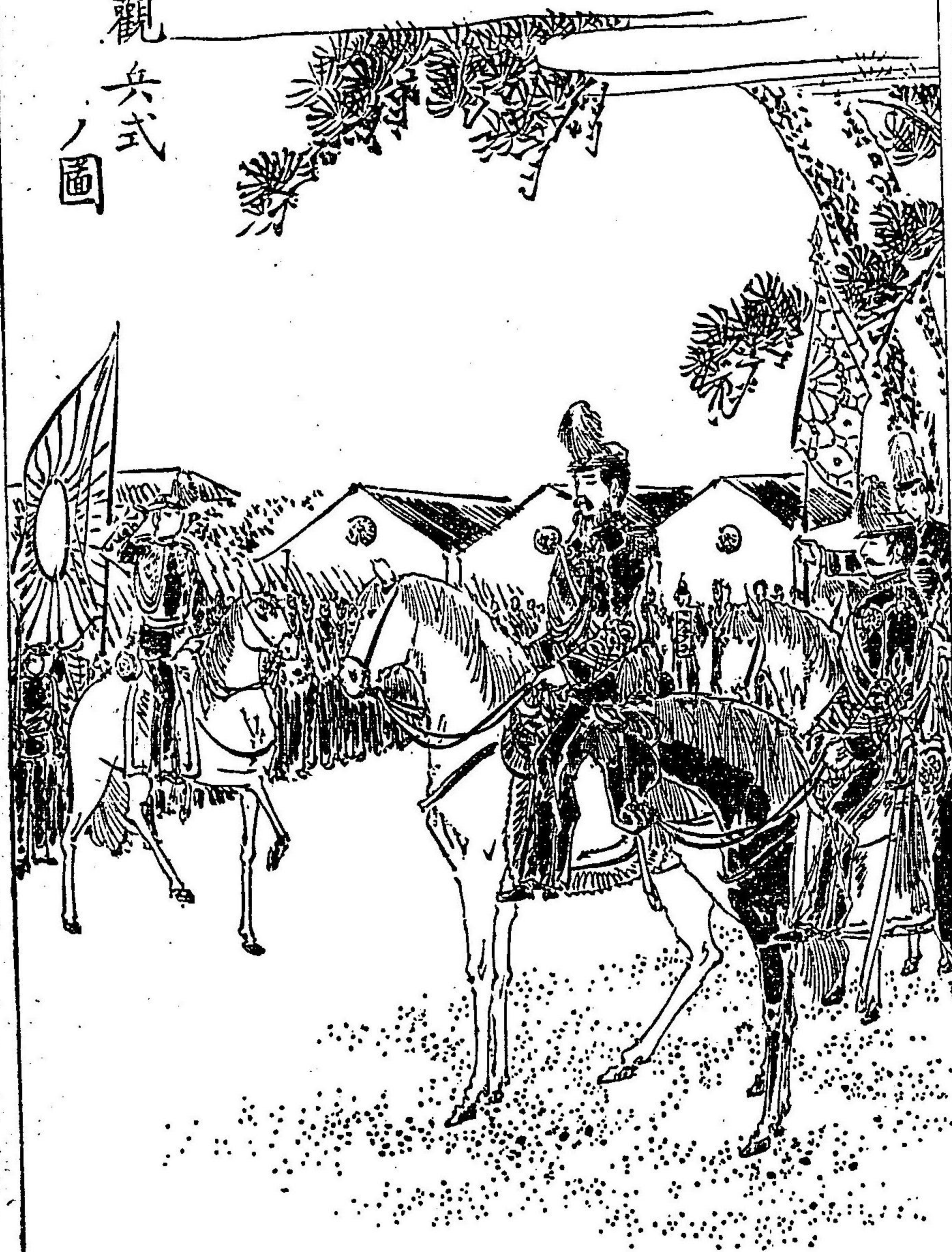
天長節

天長節とは我が今上天皇陛下の御降誕あらせられし佳辰にして普く海内をして聖壽の無疆を奉祝せしめたまふ日なり此日は宮中に於ても御祭典あらせられ又觀兵式あり

て天皇臨御ましまし御覽あらせらる

謹按するに我今上天皇陛下ハ皇考光明天皇第一の皇子にましまし御名を睦仁と申し奉る嘉永五年九月二十二日を以て御降誕あらせられ明治五年今曆頒布あるや更めて十一月三日を以て當日と爲らる而して爰に天長節と申すハ聖壽の天地の如く長く久しく無疆にましまして此四海に臨御し給はんことを祝し奉る意にして紀元一千四百三十五年光仁天皇の寶龜六年始めて詔ありて御降誕の日を以て天長節と名づけ給ひしことあり天長節蓋し此に始まる其後久しく絶えたりしを明治の初年御

觀兵式
ノ圖



再興ありて定禮とせさせ給ひしなり惟みるに我皇祖の
肇めて國を建て給ひしより以來一系相承け此に二千五
百有余年其間素より治亂盛衰なき能はざと雖ども元治
慶應の際最も騷擾を極む而して我叡聖なる今上天皇ハ
此多難の際に即位し給ひしかとも其天資の明叡仁徳な
る克く七百余年來の弊習を一洗し文武の政を躬親らし
給ひ廣く交通を開かれ有無相通せられ制度文物我が日
章旗の光輝と共に遠く海外に耀ぎ民安く國治りて實に
古へに稀なる開明の盛代に進みし所以のもの固より先
皇帝の之が素を爲し給ひしと言ふと雖ども一に我陛下

御聖教の德澤に依らざればあらざ殊に開闢以來常に皇家の尊嚴を保ちて其君民の情感藹然掬すべきもの實に萬邦無比とする所にして他の國々の昨日の臣下ハ今日の君主たる如き國家の組織とハ大に異なる所なれば常に我國体のありがたきを奉体し益々盛に聖壽の無疆を奉祝し皇室の隆運の扶翼し奉りて一旦緩急あらば我大倭魂の勇を奮ひ身を捨て義を守りて益々國家の天壤と無窮に輝がんことを勤む可きなり是れ即ち恩に報い君に忠する所以にして實に我が臣民たるもの、大義本分なり

十一月二十三日

新嘗祭

新嘗祭とは天皇親ら當年の新穀を天神地祇に供進したまひ又御親らも嘗させ給ふ御祭典よしして其起源遠く神世に在り而して最國家の重典に属するものなり又府縣の長次官をして官國の幣社に差遣せしめられ幣帛を奉りて祭祀を修めしめ給ひ普く天下の諸社をして遵行せしめたまふ謹按するよ舊制十一月下卯の日を以て之を行はせ給ひし明治五年今曆の頒布あるや更めて十一月二十三日

を以て當日とせらる又按するに舊史に或は大嘗に作る天武天皇の御時に至り毎世御即位の初めに行はせらるるを大嘗と爲し大祀に属せられ以下毎年行はせらるるを新嘗と爲し中祀に属せらる皆是れ我天祖の億兆をして嘉穀の種を播殖せしめ給ひて我等國民の常食と定めさせられ飢餓の患ひなく保生の安きを得させ給ひて國家安寧の基ひを定めさせ給ひし御恩徳に報じ奉られて益々國家人民の安寧をばからせらるる所以の大祭なれば凡そ我國に民たる者は各々吾が誠衷に省み皇室と臣民との關係を尋思して其仁徳の優渥なる一百余世二千

余年の間終始同仁父子も嘗ならざる和氣藹然たる國體の由來を研究し來らばますます其洪大無比なる御恩徳の程も悟りつべしされば妄りに泰西君民の關係と同思し詭言を吐き危行を爲すが如き舉動ある可からざるのみならず各自其分を守り限りを思ひて益々其勤むる所を勉め常に皇恩の万一よ報い奉らんとを忘るべからざるなり

大祭祝日儀式規程

此規程は小學校に於ける祝日大祭日の儀式に付て昨年十月文部大臣より規定せられたる所よして生徒も亦心得置かざる可からざるものなれば此に之を約載したるなり而して末段に此儀式に用ゆべき歌題を掲げたるものは從來祝日大祭日の儀式に用ゆる目的を以て著作したる歌詞及び樂譜に乏しくして儀式施行の際不便尠からざるに依り文部省及び東京音樂學校樂譜よして右儀式を行ふ際唱歌用に供し差支へなきものを擧げて其筋より各小學校へ通

牒ありしものなり

一紀元節、天長節、元始祭、神嘗祭及び新嘗祭の日に於ては學校長、教員及び生徒一同式場に參集して左の儀式を行ふなり

(二)校長、教員及び生徒ハ 天皇陛下及び 皇后陛下の御眞影に對し奉り最敬禮を行ひ且 兩陛下の萬歳を奉祝す

但し未だ御眞影を拜戴せざる學校に於ては 兩陛下の御眞影に對し奉りて最敬禮を行ふの式を省きて、兩陛下の萬歳を奉祝すべき式のみを行ふなり

(三)校長若くは教員は教育に關する勅語を奉讀す

(三)校長若くは教員は恭しく教育に關する勅語に基き聖意のある所を誨告し又は 歷代天皇の盛徳鴻業を叙し若くハ祝日大祭日の由來を叙する等其祝日大祭日に相應する演説を爲し忠君愛國の志氣を涵養せんことを務む

(四)校長、教員及び生徒は其祝日大祭日に相應する唱歌を合唱するなり

二孝明天皇祭、春季皇靈祭、神武天皇祭及び秋季皇靈祭の日に於ては學校長、教員及び生徒一同式場に參集して第一

項の(二)款及び(四)款の儀式を行ふなり

三、一月一日に於ては學校長、教員及び生徒一同式場に參集して第一項の(一)款及び(四)款の儀式を行ふなり

四、第一項に掲げたる祝日大祭日に於ては便宜より從ひ校長及び教員は生徒を率ゐて体操場に臨み若くは野外に出で、遊戯、体操を行ふ等生徒の心情を快活ならしめんとを務むるなり

而して右祝日大祭日には市町村長、教員及び其他學事に關係ある市町村吏員は成るべく其儀式に列し又式場の都合を計り生徒の父母親戚及び其他市町村住民をして其

儀式を參觀することを得せしむべきなり

右祝日大祭日用ゆべき唱歌は當分左の歌曲を用ゆ

歌曲 書目

我大君 文部省音楽取調掛編纂 幼稚園唱歌集

君が代 全 小歌集初編

天津日嗣 全 第二編

榮ゆく御代 全

五日の風 全

太平の曲 全

祝へ吾君を全 第三編

瑞穂

全

全

治る御代

全

全

君ケ代の初春東京音楽學校編纂

中等唱歌集

紀元節

全

全

天長節

全

全

君ケ代

全

全

以上天長節には「我大君」天長節を用ひ紀元節には「紀元節」と一月一日には「君ケ代の初春」と元始祭日及び神武天皇祭日に「天津日嗣」と新嘗祭日には「瑞穂」と又此歌詞中新嘗の新と神と修正して神嘗祭に用ふ

其他は適宜に歌詞の最も其祝日大祭日に恰當するものを用ふ

祝文認め書式

祝詞

時維れ明治二十五年一月一日此に迎新の賀式に陪し謹て天皇陛下の萬歳を奉祝す

明治廿五年一月一日

忠愛高等小學校

第一年生

國野民太郎

新年拜賀式

祝詞

鳳曆茲に改りて四海齊しく慶を納れ祥雲天に躋き瑞氣地に充ち山河草木物として新ならざるハなく城市野村處として亦新ならざるハなし蓋し新陳代謝ハ物の性なり乃ち人事百物亦一新面目を改めたりと云ふべし語に曰く一日の計ハ朝に在り一年の計ハ春に在りと生等此に年の新なると共に益々拮据相勵み益々切磋相求め門松の晩節を操て高く秀づると共に日章旗の東風に翻て永く輝々たる

共に他日業成り學就り以て此聖澤に浴するの洪恩に答へんとす今や迎新の賀式に陪するを喜び聊か卑言を陳べ此に聖壽の万歳を祝し併せて諸君の健康を祈る

全

茲に明治廿五年一月一日本校拜賀の式を擧げらる此日や氣清く天朗かに旭旗閃々和風は靡き左右に映射して校外藹然たるもの之れ満校生徒發育の氣盈ちて相映帶するものか否な我校教官諸君の生徒を薰陶して國家の材料と爲さんと欲し满腔忠愛の氣外に湧溢する所なり今や聖天子九五の位に在り文運日よ開け臣民其德澤に浴する深し然

りと雖ども之れを導く者なくんばあらざ則ち我が教官諸君の如き其人なり生等幸に學に此校にあり亦其陶冶を受く異日學成り世に處するの日は豈此鴻恩の萬一に答へざる可けんや然り而して一月一日は年華の始め一薰一陶ハ生徒を訓戒するの順序一年一級ハ進學の階級なり冀くは元始と共に駿々進みて將に春陽盛夏の天を見んと欲す聊か蕪辭を述べ以て祝詞を代ふ

全

四海同慶祥瑞の氣堂内に溢れ門頭の松樹は藹々として晚翠を含み軒前の旭旗は翩々として東風を輝き戸々壤を撃

ち家々太平を祝す千祥万禎嗚呼亦盛なる哉時維れ明治二十有五年一月一日實に是れ我が今上天皇陛下の祭服を召させ給ひて神嘉殿の南庭に出御ましまし親しく四方拜の盛典を行はせ給ひて以て國家の隆運民物の安泰を祈らせ給ふ日なり豈誰か此優渥なる聖恩に感泣せざらんや茲に我が校拜賀の式を擧げらるゝに際し生等亦其席に列す伏て誓ふらくは鳳曆の改まると共に更に一倍の黽勉を加へ他日以て此聖澤に浴するの感荷に答へんとす聊か卑辭を陳べ以て陛下の萬歳を祝し併せて諸君の萬福を祈る

全

都鄙一般朝野の別なく萬戸國旗を翻し四海新を迎ふ人心相和し人々相歡喜す是れ即ち明治廿五年の元旦なり此日や畏くも我が叡聖文武ある天皇陛下は宸殿に御し給ひ親しく四方拜の盛典を舉行せられ衆庶は業を廢し國旗を掲げ以て迎歳の慶を賀し以て陛下の萬歳を祝せざるあし生等亦此清世に遭遇し此聖澤に頼り以て學術を研究し智識を増進するを得豈何ぞ感荷に堪へざらんや茲に新年の嘉辰に際し聊か野文を草し謹て明治照代の萬歳を祝す

全

光陰矢の如く一瞬過ぎ去て茲に明治二十五年の新天地を

迎ふ伏て惟みるに此日拂曉我が叡聖なる今上天皇陛下は親ら祭服を召させ給ひて神嘉殿の南庭に出御ましまし四方に向はせ給ひて皇太神宮を始め諸皇陵及び天神地祇等と拜し國家の治平萬民の安泰を祈禱し給ふと實に是れ陛下の至仁至惠なる億兆の之を尊敬仰慕すると猶向日葵花の太陽に向ふが如く赤子の慈母に於けるが如くして上下相和し海内亦虞なきもの豈宜ならざや時正に梅花を笑て高潔を呈し柳枝は舞て綠芽を含み瑞氣藹々として迎新萬歳の祥を表し見るとして新様ならざるはなく聞くとして賀言ならざるはなし檐頭に掲けたる日章旗は惠風に翻々

として万邦冠絶の色を顯ハし賀客の來往する紡錯して織るが如く戸々泰平を謳歌して滿城藹然たるもの豈聖世の美事ならずや生等臣民亦此盛世に遭遇す何ぞ賀せざるを得んや何ぞ祝せずして可ならんや我校茲も新年拜賀の祝式を擧げらるゝに陪し欣喜に堪へず鄙言を綴り謹て天皇陛下の萬歳を祝し國家の長久を祈り以て履端の祝辭とすと云爾

全

隙行く駒の足早み舊きを送り新しきを迎ふる年も今とはや明治二十五とせの梅ぞ咲く初春とはなりにけり今日は

日暖に風輕く四方の山々霞をこめて谷の戸出づる鶯の聲も珍しう聞え梅は今や將に咲き初めんとし岸の柳は深く緑を含みて風に舞ひ福壽草當に笑ふて水仙花香しく門邊に立ちつゞく松飾り軒端になびく旭の旗豊けき御代の志るしなり灰かに聞きぬ今日は我が尊き皇帝の神嘉殿の南庭に於て四方の神祇を拜し給ひ我が瑞穂國の安らげきを禱りたまふと恭しく惟みるに上の下を愛せられ下の上を慕ふや恰かも赤兒の慈母を見る如く和氣藹々として自と禮儀正しきぞ實に我が國の美德にこそ此に今日の賀式に列し聊か卑しき言葉を連ねて以て陛下の萬歳を祝すにな

んやよ人々我友ら常に皇恩の深きを思ひ夢にな忘れたま
ひそやよ人々祝へや祝へ我が君を君は千代ませ八千代ま
せ君は千代ませ八千代ませ」

全

今日は四方拜とて明治二十五とせのとしめなり凡べて物
の始めといへば芽出たきことぞ多かりける況いて年の始
めをや戸々業を廢し職を休み門に往き來ふ年始詣での禮
者人門には門松とめ飾り心も赤き日の丸の旗をば軒に翻
へしたる豊けき御代そのどかなり長閑けき春を壽きて聊
か祝し奉る

あら玉の年の初めの文の聲

八千代榮へん志るしなりけり

全

鳥兔匆匆已に明治二十四年を辭し此に二十有五年の新日
月を迎ふ瑞氣は堂に溢れ國旗は高く緞り賀客來往織るが
如く歡虞擊壤亦盛なりと謂つべし茲に我が小學に於て新
年拜賀の式を擧げられ生等幸よして其席尾に陪す顧ふに
今や文化日進の秋に際し寒村僻邑至る所として學校の設
立あらざるなく邑に不學の徒なく里に無職の民なく駿々
乎として開明に達し國運日に榮ふ嗚呼盛なる哉今や迎新

よ遭ふ亦將に一倍の文華を進めんとす謹んで聖世の隆運
を祝し併せて聖壽の萬歳を祈る

全

明治二十五年一月一日茲に本校拜賀式に陪し一言以て祝
意を表せんとす古人言へるあり苗にして秀でざるはなく
秀で、實らざるはなしと惟ふに生等は所謂苗にして將よ
秀で、國家の富強を増進し國の獨立安寧を維持すべきの
實を結ぶべきものなり然れども時よ風雨虫旱の災あり以
て秋獲を得ず然るを況んや怠惰にして其耒耜を採らざる
よ於てをや此よ新年の祝式に臨み聊か憾なき能はず然り

と雖ども既往は追ひ難く徒に往事を悔ゆるも益なし今や
幸に百物と一新面目を改むるに際す伏て誓らくは爾來一
層の注意と勉強とを以てし能く其風雨虫旱を凌ぎ異日滿
城滿車の秋獲あらんとを期せん謹て本日祝辭となす

全

我國學政の發布以來茲に將に二十年其經過するの時日少
しとせず其進歩せるの程度亦低しとせざ駿々乎として益
益開け益々進んで止まらざらんとす顧みて生等去歲の成
績を考察し來れば實に日進の開明に馳背せるの憾みなき
能ハぞ思ふて斯に至れば豈心に愧づるなきを得んや我が

友愛なる同窓諸君よ予ハ誓て此新年と共に益々忍耐不屈の精神を養成し以て世の文明と歩を譲らざらんを期す諸君果して同感なりや否や茲に明治廿五年一月一日新年拜賀の嘉式に列し聊ハ卑辭を陳べ以て祝詞に代ふ

全

星移り物替り茲は明治二十五年の新天地を迎へ瑞氣藹然たるの中に本校拜賀の嘉式を擧げられ以て聖世の萬歳を祝し以て教育の隆盛を賀せらる豈一言の祝意を表せざるを得んや夫れ梅は雪を侵し水仙は霜を恐れずして馥郁高潔の美花を呈す語も所謂霜雪を経ざれば春に遇はざらば

實は以ある哉蓋し學生は之を梅花水仙に譬ふべきなり其美果を呈するハ抑末なり有爲の少年豈寒節を踏まざして止むべけんや今や百物年と共に面目を一新せらるに會し生等大に感ずる所あり聊ハ蕪言を陳じ以て祝意を表す

紀元節賀式

祝詞

凡そ國家として元始あらざるをあし然れども萬國一として其帝王一系統の者あらず獨り我が邦ハ世の舊國の一として而して皇統連綿無窮に傳はり其年を閱する二千五百

有る年代を經る實に百二十余世なり嗚呼我が國の紀元たる豈敢て他邦の比すべき所ならんや其君民の親和藹々たる者亦宜なる哉乃ち我れ等國民たるもの其光榮の余裕あると共に其紀元の他邦に勝ると共に之を祝し之を紀念するとも亦切ならざる可からず抑も本始を重んずるハ即ち將來を重んずる所以なり左れば苟くも我が國に民たる者ハ粉骨碎身以て此萬世一系統なる大日本帝國をして益々其國体の尊嚴を維持し爾來一倍の光威を發輝せざる可からず是れ實に我が國民の責務なり聊か鄙言を陳べ謹て佳節を祝す

全

朝に學校に學び夕々家庭に習ひ暖衣飽食嘗て飢寒の憂ひを知らざるものは是れ誰の恩惠ぞや蓋し父母を措て他にあることなし然りと雖ども父母ハ又誰が恩惠に依りて其生命財産を保護し以て安全に渡世するを得るや是れ我が叡明なる歴世天皇陛下の優渥なる德澤に依らざればあらざ其洪恩の廣且大なる山の高きも海の深きも雷ならざ豈偉ならざや時維れ明治二十五年二月十一日實に是れ我が大日本帝國誕辰の日なり乃ち皇宗神武天皇奸を討じ逆を誅し以て四海を統一し此に始めて治國安民の基を定め肇め

て皇位に即かせ給ひし吉辰にして爾後皇統連綿今や二千
 五百五十二年の久しきを経て皇威益々振ひ文運益々開け
 遂に立憲政体の聖世に至る素より今上陛下の美德に依る
 と雖ども抑も亦神武皇宗の徳を樹つる極めて深厚なるに
 あらざるよりハ安ぞ能く此の如く夫れ盛なるを得んや故
 に此日や永く萬々歳の後に至るも豈徒に経過して可なら
 んや豈祝せずして可あらんや聊か拙文を綴り謹て祝意を
 表す

全

恭しく惟みるに我が皇宗皇都を大和國に定められてより

以來食足り教敷て邦俗の美となすと茲に二千五百有余年
 其間一治一亂王政も亦隨て盛衰なき能ハず然れども未だ
 嘗て天位を窺覲し皇室を危くしたる者あらず殊に嚮々明
 治維新に會し王政復古し百業具に備はり其開明其進歩滔
 滔河水を決するが如く然り是れ我が聖主叡明の然らしむ
 る素より論なしと雖も抑亦我が皇宗の徳澤と謂ハざる可
 けんや茲に我が校典式を張り生等として拜賀せしめらる
 るに陪し聊る鄙懷を述べ謹て紀元節を祝す

全

千時明治二十五年二月十一日實に是れ我が皇宗神武天皇

陛下奠都の佳節なり戸々の旭旗ハ恩風に翻り藹々として
 太平の象を顯はし民安く國豊にして皇統連綿年を経る此
 に二千五百有余年實に萬邦無比とする所にして此一事以
 て四海に誇張するに余あり然るを況んや國たる此の如く
 小く地たる此の如く狭く而して開闢以來未だ曾て外邦の
 侮辱を受けざ却て國威を四外に輝かせしと擧げて數ふ可
 からざるをや嗚呼我れ等國民の光榮豈亦感荷に堪へざら
 んや茲に我國紀元の國家と尙向後幾万年の久しく國威の
 尙益々日月と耀かんことを祈り併せて我が皇室の萬歳を祝
 す

全

維時明治二十有五年二月十一日茲に本校に於て紀元節の
 賀式を擧げらる伏て惟みるに神武天皇陛下天祖天神の威
 烈を承け給ひ一舉東征して各所の豪酋を掃蕩し以て皇都
 を大和國橿原に定めさせられ此に肇めて天皇の御位に即
 かせ給ふ今を距る實に二千五百五十二年なり爾來皇位の
 尊儼然として動きなく代を傳ふる當に一百二十余世其間
 治亂盛衰の故なきにあらずと雖ども其皇家の尊嚴なる未
 た曾て一毫の虧損あらざ豈亦盛ならざや我れ等臣民今日
 に至る泰平業に安んぜし者素より明治天皇陛下の恩澤に

依ると雖ども抑亦皇宗徳を樹つるの深厚なるに因らずんばあらず左れば苟くも我が臣民たる者各其業を勵み其職を勉め以て天壤無究の皇運を扶翼し奉らんとを忘る可からざるなり此に本日佳節を祝す

全

謹んで惟みるに我が皇宗神武天皇已に海内を統一して万世無窮の皇基を開き給ひしより茲よ二千五百五十二年本日恰も紀元の佳辰に當る豈賀せざる可けんや豈祝せざる可けんや今や國家安寧にして列聖恩波四海に洽く万民鼓腹太平を謳ふ是れ皆皇宗の遺烈と今上の恩恵とに頼らざ

るハなし皇恩の優渥なる誰れか感泣せざるものあらんや誰れか此大節を賀せざるものあらんや生等此よ此盛式に列り聊か祝辭を呈せんと云爾

全

茲に紀元節の大辰に接す天氣亦快晴よして空に一點の翳を殘さざ國旗は軒頭に連り翻々として旭陽に輝き千門萬戸和氣藹々として泰平の光景實に此に見ハる亦聖世の餘澤なるべし伏て帷みるに皇宗神武天皇夙に天資の叡邁を以て中國を平定し給ひ遂に大和橿原の宮に於て天位に即らせ給ふ今に至る實に二千五百有余年なり其皇統の連綿

として曾て外邦の侮辱を受けず皇祚の赫々日月と窮りなきの鴻基を創制し給ふ嗚呼其盛徳大業實に至れりと謂つべし普天の下率土の濱苟も我が皇澤に浴するもの誰か豈之れを祝せざる者あらんや生等亦謹て一言を陳べ以て皇祚の萬歳を奉祝す

全

明治二十五年二月十一日茲も當校に於て紀元節の賀式を行はる惟みるに我が皇宗神武天皇陛下に叡武の資を以て百難を排し兇賊を攘ひ以て海内を一統し以て永世不朽の皇基を立てさせ給ふ爾來皇統連綿代を經る一百廿余世

年を累ぬる實に二千五百五十有余年なり豈亦盛からざや其國家の治平なる億兆の安泰なる稜威赫々寶祚霄壤と窮りなき苟も我が臣民たる者滿腔の誠意を捧げ以て皇徳の萬歳を祝せざる可けんや此に本校の賀式に陪し聊か蕪辭を陳ね謹て佳辰を祝す

全

惟みるに我が皇宗神武天皇の肇めて天位に即かせ給ふや爾來二千五百有余年武以て國を建て文以て民を治め四季順に五穀豊に降て明治の照代に至り外交日に開け國運日に進み立憲政体已に行はれて東洋の文明は業に牛耳を執

誰か其聖徳の隆運を祝せざる者あらんや心なきの禽鳥
は自由を歌ひ意なきの流水は歌曲を奏す豈亦盛ならずや
茲に紀元節に接す我が校其祝式を擧げらるゝに陪し生等
實に感佩に堪へず聊か記して祝詞となす

天長節賀式

祝詞

我國天祖の肇めて國を建て給ひしより以て皇統連綿一系
相承け万古傳へて而して渝らざ之を泰西に尋ね之を東洋
に求むるに未だ其倫あらざ嗚呼亦盛なる哉然りと雖ども

其間治亂盛衰なき能はず元治慶應の際最も騷擾を極む叡
聖なる今上皇帝此多難の際に即位し給ひしかども天資英
明仁徳なるを以て七百余年來封建の弊習を一洗し文武の
政を躬親らし凡そ善政良法具備せざるハなく大日本の光
輝は旗章と共に遠く海外に耀き我邦をして今日の如く雍
熙ならしむるもの實に我が明治天皇陛下の恩澤に因らざ
るハなし生等此盛世に遭遇し優渥なる聖恩の下に浴する
を得る何の幸か之れに如かんや即ち今三日は陛下降誕し
給ひし佳節にして苟も我が國民たる者誰か之れを祝せざ
るものあらん生等幸に此式場に列す唯野文を草し祝詞に

代ふのみ天長へに地久しく聖壽萬々歳

全

國ハ民に因て成り民は君に因て治まる若し夫れ世に明君
無くんば暴賊蜂起し蒼生塗炭に苦み弱肉強食の慘禍豈免
るを得んや嗚呼君王の鴻德亦偉なる哉伏て惟みるに我
邦皇統一系萬古緝續する決して宇内諸國に無き所よして
其君民親和父子も帝ならざるもの亦萬邦の企及し能はざ
る所なり然り而して今上陛下の允文允武なる夙に七百余
年の弊習を一洗し政令革まり學政布かれ山の陬海の濱到
る處として庠序の設けあらざるなく咄嗟の聲を聞かざる

なく禮樂刑政教化の具皆已に修理す生等生れて明治の民
となり明治の學童となる何ぞ幸なるや聞く堯舜の民は堯
舜の心を以て心となすと今よりして我海内幾十万の學童
我が阪府幾万の學生と百折不撓斯の學を勉め斯の藝を修
め共に進て機に後るゝなく他日明治聖代の良民となり以
て萬一を報せんと生等の望みなり此に天長の佳辰よ遭ひ
聊か卑言を陳し謹て陛下の萬歳を祈る

全

我大御國は天祖の統を垂れ給ひしより以還列聖相承け萬
世渝らず之れを宇内萬邦に求むるよ未だ倫比あらざ豈亦

盛ならずや然り而して今上皇帝文武叡聖の資を以て鴻緒
 を承けさせ給ひ夙に舊來の弊政を一洗し萬機を親裁し五
 事を誓約し廣く歐米諸國と交通を開き教育の普及を謀り
 海陸の軍備を擴張し運輸の便利を與へ農商を勸むる等凡
 そ天下の制度文物一として備はらざるはなく富國利民の
 術一として盡さざるはなし其鴻德其仁愛豈比するに物あ
 らんや嗚呼此盛世よ生れ此德澤に浴する者必だや同心以
 て國益を謀り協力以て聖恩の万一に添はんとを勉めざる
 可からざ茲に天長の令節に當り生等幸に其賀式に列す謹
 て佳辰を祝し併せて聖壽の万歳を祈る

全

今日は天長節にて勿體なくも我が大君の御降誕ましませ
 し佳辰にぞある今を四海にだやかに波風たゞ治まるは
 實に大君の賜なり神武のみかど畏くも大和の國の樞ハら
 に宮を奠め給し始めより二千五百有余年一百二十有余代
 承けつぎ來よしこの神國は外つ國々を尋ねてもかゝるみ
 國は又となしさても慶たき事ならざや我れ等か家の軒の
 端に立て列ねたる日章旗はめぐみの風よそよぎつゝ耳と
 ぶろかす祝砲は倭魂よびたこし心も勇むばかりなり四方
 に生ひ育つ民ぐさは治る御代を祝ひつゝ我る日の本の皇

運の千代も八千代も限りなくいや榮えんを祈るなり

全

今や文明の隆運に會し行くとして學校の設けあらざるなく求むるとして書籍の購ふべからざるものなし生等乏しきを以て亦智識を研磨し才能を發達するを得るもの抑も教育の力に依ると言ふと雖ども豈亦聖世の德澤にあらざるなきを知らんや時維れ明治二十有五年十一月三日實に是れ今上天皇陛下御降誕の節日なり國旗は高く翔りて雲の如く謳歌巷に溢れて戸々聖壽の萬歳を祝せざるなし茲に我が校亦其祝會を開かるゝに際し聊か蕪辭を述べ以て

祝詞に代ふ

全

伏て惟みるに陛下登極以降茲に二十有五祀海内寧清に治化日に加はり政令普く軍備焉に張り教育盛に理財焉に整ふ普天の下率土の濱我が皇化の及ぶ所一物として其處を得ざるはあし蓋し陛下の明叡なる夙に外交を開き廣く宇内の形勢を察し長を採り短を補ひ經綸畫策其宜しきを得たるに非ざれば安んぞ能く此に至らんや今や已に立憲政治の世と爲り日本民法亦將に明年より實施せられんとす法度焉に立ち權利焉に伸び治化の及ぶ所猶水の卑きに就

くも如し此に天長の佳節に會し燕辭以て敢て寶祚の無究
と陛下隆運の萬歳を祝す

全

茲に明治二十五年十一月三日畏くも我が叡聖なる明治天
皇陛下御降誕の吉辰なり此日や氣清く天朗かに千万の國
旗は恩風に翻り億兆の蒼生は泰平を樂み千門万户都市と
して野村として颯然祥雲を盡さざるなし伏て惟みるに皇統
連綿萬古曾て易らざる上の下を愛撫せらる猶赤子の慈母に
於けるか如く仁風四海に溢れて教化天下に普く傳へて聖
世に至り徳化益々布かれ昇平日に榮ふ嗚呼此仁此徳天地

も亦容るゝなし唯冀ふ寶祚萬歳天壤の久しきと共に無窮
ならんとを聊か本日佳節に接し謹て祝詞に代ふ

全

謹て惟みるに本日は忝くも我が英明文武なる聖上御誕辰
の佳節にして四海波靜に万户國旗を掲げ上は官廳の諸大
臣を始め下は都鄙の賤民に至るまで盛に聖壽の萬歳を祝
せざるなし此に我が小學亦生員を會し祝賀の式を開かる
不肖生等幸に校生の員にあり以て席末に陪するを得たり
乃ち衆生に代り聊か數辭を陳ね謹て天長の佳節を祝すと
云ふ

全

本日は是れ我が允文允武なる明治天皇陛下御隆誕の佳節なり億兆皆事を廢して万戸悉く旭旗を掲げ其團欒する者其來往する者皆以て聖徳の萬歳を祝せざるなし惟ふに地は東洋の一孤島なりと雖ども國は世界の最小國なりと雖ども氣候中和にして百物具備し民俗温良にして忠亮直實食足り教敷て邦俗の美をなすと茲に二千五百余年なり然りと雖ども其開明文化民物昇平にして明治王政の隆昌を極むる實に往古絶無とする所素より皇祖皇宗の遺徳に依ると言ふと雖ども豈亦今上叡明の然らしむるに非ざるな

全

きを得んや茲に我が親愛なる教官諸君の此講堂に參集して此佳節を賀せらるゝに陪し聊る蕪辭を陳ね以て其徳澤の厚大なるを奉謝し併せて聖壽の万歳を奉祝す

時維れ明治二十五年十一月三日茲に天長節の佳辰に當り本校拜賀の式を擧らる生等亦其下席に列するを得欣喜何ぞ堪へん伏て惟みるに我が今上天皇陛下叡聖文武の御盛徳に對し奉り敢て生等の頌辭を陳ぶるは反て不敬を免れざれども然れども聖壽の天と共に長へに寶祈の地と共に久しむらんとは同胞四千万の衆しと雖ども實に一心の如

くならん乃ち菲辭を草し以て祝辭となす

元始祭賀式

祝詞

維時明治廿有五年一月三日實に是れ我が今上陛下の躬親ら賢所及び天神地祇歷世諸帝を祭祀あらせられて寶祈の本始を祝し給へる日なり伏て惟みるに天祖天神の肇めて此國土を開始し給ふや民物此に安く動植此に息ひ傳へて二千五百有余年の今日に至り益々開け益々進み徳化大に行はれて億兆皆太平を樂む素より歷代皇帝の化育預つて

力ありと雖ども抑亦天祖徳を樹つる深厚に彝を垂るゝ明德なるに基因せざんばあらざ是を以て海内治平民其徳に懷き瑞氣駿驤邊陲其澤に頼り其君民の情感藹然擲すべき心の實に萬邦無比とする所にして而して彼の泰西諸國の昨日の臣下は今日の君主たるが如き國家の組織とは大に異なる所なれば苟も我が臣民たる者我が國体のありがたきを奉体し益々國家の天壤を無窮に輝あんとを勤むべし是れ即ち恩に報い君に忠する所以なり茲に我が校此祝式を擧げらるゝに際し聊る卑言を陳し以て祝辭となす

全

茲に元始祭に會し我校盛に其式典を擧げられ不肖生等をして參集以て此盛典を祝せしめらる此日はれ我が聖上の賢所及び皇靈神殿を祭祀あらせられて我が天祖の此國土民物を生育し給ひ國家の基本を立てさせ給ひたる元始を祝し給へる節日なり國旗は高く翻て瑞氣四海に充ち天意人心相合致して和氣藹々たり萬民皆業を廢し無心の兒童亦太平を唱歌す嗚呼此盛世に遭遇し此聖澤に浴するを得る安ぞ知らん是れ皆我が天祖明德の遺澤なると豈祝せざる可けんや豈賀せざる可けんや此に此末席に陪するを得謹て祝意を表す。

全

恭しく惟みるに本日は是れ我が勅聖なる今上陛下の親ら賢所及び皇靈神殿を祭らせられて我が寶祚の元始を祝させ給へる日なり此日や穹天一翳の妖雲なく輝々たる旭日東天に輝き光芒四海を照し國旗軒頭よ翻り萬民鼓腹昇平を謳ふ者惟ふ我が聖上仁澤の優渥なるに依ると言ふと雖ども抑亦天祖德を樹つるの深厚なるに基因せずんばあらば我校茲に此祝式を擧げられ生等をして參集以て之を祝賀せしめらるゝに陪す生等不肖なりと雖ども豈一言の賀詞なくして止まんや今や列國對峙強を争ひ富を競ひ一

歩を誤らば鐵艦海を掩ひ彈丸星飛び雌雄立どまろに決す
 るの時に當り此局面に對し如何なる策かある勇なかる可
 べからず智なかる可べからず智勇兼備始めて我が國の元氣興
 起すべきなり蓋し此氣力あり元氣あるの人士を養成する
 思ふに全國數万の小學亦預つて力なくんばあらず茲に元
 始祭に會し我國家建肇の元氣を追想し今日の盛典を祝賀
 するに臨み之に代ふるに規を以てする所以なり

全

今日を我が今上天皇陛下親ら賢所及び皇靈神殿を祭祀あ
 らせられて以て天祖の威徳を祝させ給へる日なり伏て惟

みるに明治三年一月三日聖上神祇官に幸せられて天神地
 祇官八神殿及び歴世諸帝を祀らせ給へり元始祭典蓋し此
 に始まる然りと雖ども此事古へも毎月一日に賢所即ち
 と内侍所の御供へあり又伊勢の内宮外宮等にも年始の御
 祭ありし次第なれば明治の初年茲に之を起されて年々の
 御式とはありしものなり左れば我が國民たる者今日聖恩
 の優渥なるを感佩すると共に天祖遺徳の有りがたきを奉
 謝して身を盡し心を竭して常に皇家の尊嚴を保ち國運の
 向後尙幾万年の無疆に傳えらんとを肝銘せざる可べからざ
 るなり茲に我が校其賀式を舉行せらるゝに際し一言以て

祝詞に代ふ

全

抑天下凡百の事一として皆本始あらざるはなきなり形あるや影之に随ひ聲あるや響之に随ふ未だ影あつて形なく響あつて聲なきものを聞かざるなり然り而して其影の大長短は即ち形の大長短に因り響の高低清濁は即ち聲の高低清濁に因るなり惟ふに我が皇祖皇宗の肇めて國を建つるや此に應に數千年國益々榮へ化益々行はれ君民相和し海内治安一系繼承傳へて今日の昭代に至るものは是れ偏に我が天祖神靈の遺徳にあらざして何ぞや此に聊か卑

言を陳ぬ謹て元始祭を奉祝す

全

畏み惟みるに本日は是れ我が大君の天祖天神地祇及び歴代の皇帝を祭らせられて寶祚の元始を祝させ玉へる佳辰にして大八洲のものをこの等めのこの等は今日を限りと祝ひ奉る日にあるぞかし況いて世界の中に國といふ國はあれどもうら安の國の名にひて外つ國の人のうらやむ比ひなき國を肇めさせ給ひたる大御勳功を誰れか感佩せざる者あらんや妾らけふ此賀式に列なるを得たるも是れみな皇祖皇宗の餘澤に外ならじ祝へよ〜四千余万の皇國人本と

忘れな元始祭今の恵みを忘るゝなこゝに聊か奉祝せん

全

千門万户國旗を翻し歡聲謳歌湧くが如く齊しく太平を祝し同しく皇運の萬歳を賀す實に是れ元始祭の佳辰なり天皇ハ親ら賢所及び皇靈神殿を祀らせられて寶祚の本始を祝したまひ皇太子及び皇太后宮皇后宮にも亦御拜あらせられて皇運の隆昌を祝せしめらる豈苟も臣民たる者の黙して止むべきの日ならんや我校亦此よ生員を參集せしめられて盛よ此節日を賀せらる生等幸よ亦式に末席に列す聊か蕪辭を陳ぬ以て寶祚益々無窮に傳ハリ皇威の益々

日月と耀かんことを謹て祝す

神嘗祭新嘗祭賀式

祝詞

維時明治二十五年十一月二十三日此日は是れ當年の新穀を天祖天神に饗祭あらせられて以て天祖の遺徳に報謝あらせらるゝ日なり惟ふに此儀遠く神代に起原し最國家の重典に係る蓋し億兆の之に依て保生の安きを得之に依て飢餓の患ひを免かれて職業是れ勵み徳化此に行ハれ海内寧清民物安泰傳へて數千余年の今日に至り皇徳益々布かれ

て國威益々張るもの豈天祖素を爲すの優渥なるよあらざ
 るなきを知らんや古人曰く衣食足て禮節を知ると生や是
 に於てか古人の生等を欺かざるを知る若し夫れ天祖の萬
 民をして此嘉穀を播殖せしめざらんか韓氏の所謂奔走に
 衣食して豈亦今日温厚淳良の徳化に浴するの暇あらんや
 思ふて此に至らば苟も國民たるもの誰か皇徳の鴻大を感
 佩せざる者あらんや茲に我が校此賀式を擧げらるゝに列
 し謹て皇運の萬歳を祝し併せて新嘗の大祭を奉祝す

全

旭旗翩々として瑞氣天地に満ち万戸業を廢して家々昇平

と樂む實に是れ十一月二十三日新嘗祭の佳辰なり伏て惟
 みるに上古天祖の此嘉穀を得させられ万民をして普く之
 を播殖せしめ給ひ以て平素の常食と定めさせ給ふや茲に
 始めて保生の安きを得亦飢餓の患ひを免かれて無事太平
 以て此優渥なる聖澤よ沐浴するを得たり豈誰れか此神恩
 のありがたきを肝銘し益々事に勵み業に勉めて此鴻恩の
 萬一に報答せざる者あらんや此に本校其祝式を擧げられ
 生等をして亦此に參會せしめらる聊か菲辭を申し謹て皇
 徳の萬歳を祝す

全

て國威益々張るもの豈天祖素を爲すの優渥なるよあらざるなきを知らんや古人曰く衣食足て禮節を知ると生や是に於てか古人の生等を欺かざるを知る若し夫れ天祖の萬民をして此嘉穀を播殖せしめざらんか韓氏の所謂奔走に衣食して豈亦今日温厚淳良の徳化に浴するの暇あらんや思ふて此に至らば苟も國民たるもの誰か皇徳の鴻大を感佩せざる者あらんや茲に我が校此賀式を擧げらるゝに列し謹て皇運の萬歳を祝し併せて新嘗の大祭を奉祝す

全

旭旗翻々として瑞氣天地に満ち万戸業を廢して家々昇平

と樂む實に是れ十一月二十三日新嘗祭の佳辰なり伏て惟みるに上古天祖の此嘉穀を得させられ万民をして普く之を播殖せしめ給ひ以て平素の常食と定めさせ給ふや茲に始めて保生の安きを得亦飢餓の患ひを免かれて無事太平以て此優渥なる聖澤を沐浴するを得たり豈誰れか此神恩のありがたきを肝銘し益々事に勵み業に勉めて此鴻恩の萬一に報答せざる者あらんや此に本校其祝式を擧げられ生等をして亦此に參會せしめらる聊か菲辭を伸し謹て皇徳の萬歳を祝す

全

豊あし原の我が瑞穂の國はいやさかみのぼりて天の戸の開
 け行く明治の大御代も今日は二十五とせといふ十一月の
 二十三日とハ成りにける晴れ渡りたる大御空に輝く戸毎
 の國旗ハ揺々として漣波の岸邊に漂ふ如くにて實にぞ君
 の御蔭の四方になびける風情なり惟みれば我が天祖天神
 の我れ等平素の食とせる此嘉穀を下民草として播ゑさせ
 られて始て保生の安きを得て無事安穩に渡世するを得た
 る其新穀を先づわが天神の御前へ奉られて饗祭し給ふ事
 の由よて最とも國家の重典に属するとかや其仁徳の優渥
 なる民草いかに靡かざらん恵みの露も潤ふもの能くく

之を畏こみて朝な夕なに思ひ出て忠義の道を忘るゝな左
 ればけふ我が校よて此盛なる式典を擧げられて物數から
 ぬ不肖らまで目出たき席に列なりて卑しき辭をも顧みず
 いさゝか書きつれて祝ふになん

全

茲に新嘗の大祭に會し本校盛に其祝式を舉行せらる伏て
 惟みるに此日は是れ畏くも我が今上陛下の當年の新穀を
 伊勢神廟に饗祭あらせらるゝ日よして而して上古天祖の
 始めて此嘉穀を得させ給ひ万民をして之を播殖せしめら
 れたるハ實に數千余年の以前にあり爾來世安く國豊よし

て以て今日の聖代に至り生等同胞の飽食暖衣して嘗て亦
飢餓の何物たるを知らざるものは是れ豈天祖遺徳の賜にあ
らずや誰か此佳辰に當り一語の辭なうして止まんや不肖
某敢て蕪辭を陳ね謹て祝意を表す

全

万戸日章旗を翻し四民太平を唱ふ謹て惟みるは我大御國
ハ天祖天照太神の創始し給ふ所にして國土は即ち皇室と
終始し其億兆の頼て以て保生の安きを得る所以の嘉穀も
亦天祖の播殖せしめ給ふ所に因る然り而して此新嘗の大
儀は當年の新穀を天祖に奉饗あらせられて以て其洪徳に

報賽し給ふ所以の祭典にして而も國家重典に属す時に明
治二十五年十一月二十三日此新嘗祭の佳辰に會ふ嗚呼苟
も我が臣民たらん者ハ今日無異安泰の昭代を思ひ天祖鴻
恩の感佩を銘し國の爲家の爲心力を盡し此身を捨て皇
運の益々天壤無窮は傳はらんとを扶翼し奉るべきなり此
に本校此祝式を擧げらるゝに陪し聊か腐言を述べて祝に
代ふ

學校開業式

祝詞

教育の國家に於けるや猶飲食の人身に於けるか如く人身
 飲食を欠けば滅亡し國家教育を欠けハ衰頹す其東洋諸州
 の常に歐米各國に數歩を讓れる所以の者蓋し此に在るか
 然り而して獨り我が國ハ夙に茲に見るあり普く泰西諸國
 と交通を開き彼れの新知識を取り彼れの新思想を斟み以
 て國教を進め以て國民陶冶の基本を立つ爾來此に數十年
 奎運日に盛に文化月に普く殖産の道開け工藝の業進み海
 内を擧げて郁々乎として燦然たらしむる者是れ扁に教育
 の力よあらずして何ぞや嗚呼國家に教育の必要なる亦喋
 々を要せざるなり茲に我が□□小學新築功を了へ本日と

以て開校の式を擧げらる亦將に數万の兒童を教育し益々
 邦家文運の隆盛を裨補せんとす豈慶すべく賀すべきの至
 りならずや生等幸に貝に末席に加はるを喜び一言以て祝
 詞となす

全

學校ハ人材の出づる所而して國家の盛衰に關すと方今奎
 運勃興賢學亦所々に起り學童亦百万を以て數ふ文學の盛
 なる古より未だ今日の甚しきあらざ此に本校新築落成を
 告げ開業の盛典を擧げらる學徒立るに集り生等亦貝に此
 に陪す豈我が校の爲に賀し國家の爲に祝せざるを得んや

希くハ爾來益々精勵庭前の梅花の寒節を踏て馥郁たるが如く松柏の雪霜を凌て益々深緑なるが如く以て今日の盛典と共に益々人材を養成し永く我が校の隆昌を祈る聊か野辭を陳べ以て祝詞に代ふ

全

瓦光磷々粉壁硝窓と相映射して一見文華の場たるを知らしむる者は是れ□□小學校新築の校舎にして實に事を去年七月に起し成を今年四月に期す工善く吏勤め寒暑怠らざ既に竣りを告げて今や盛に開校の式を舉行せらる不肖生等亦席末に列なるを得豈一言の祝辭なきを得んや抑國家

の盛衰は教育の隆替も原づき教育の隆替ハ學生の勉否に基づく然らば則ち生等の勤怠ハ他日邦家の消長に關するや言を待たざるなり嗚呼生等の任亦大なる哉希くハ爾來益々切磋相求め拮据相勵み他日邦家幾分の隆盛を補はん

全

本邦學制を泰西に斟み教育の普及を務められしより以來文運着々進歩を來し益々進て極熾の域に達せんとす即ち之を大に志してハ國家を文明の最高度に進め之を小にしては個人の完美的福祉を増進せしむる蓋し尠少にあらざる

なり嗚呼教育の社會に必要なる亦何ぞ贅せん而して私に
 怪む此地數千の學童あり之を教育する多くハ是れ不規律
 不完全なる所謂寺小屋教育を以て充てらるゝと豈盛世の
 一大欠事ならざや然り而して今や續々完美なる學起る
 乃ち嚮きの怪訝や此に至て烟消霧散せり本校亦其必要に
 應じて起る亦將に文明的完全の教育を施し益々明治隆昇
 の文化を裨補せんとす豈賀せざる可けんや此に此盛式に
 陪するを喜び一言以て祝辭となす

全

輕風習々祥雲藹々梅花は笑を含み柳糸ハ風に舞ふ此和氣

駿驤たるの候よ當り茲に我□□校開業の盛典を舉行せら
 る生等亦員にあり其席末に列するの榮を辱うす聊か卑辭
 を陳ぬ以て祝意を表せんとす夫れ國家の泰否ハ風俗の醇
 澆よ原し風俗の醇澆ハ教育の如何に關し教育の基ハ學校
 の隆替よ係る然らば則ち國家の泰否ハ實に學校の隆替に
 原するや明けし惟みるに辱くも我が勸聖なる皇上陛下大
 に勸慮を教育の道よ盡させ給ひ曩に我が教育の方針を勅
 語あらせられ以て渾厚眞率忠君愛國の國民を養成あらせ
 られんとす此時に當り我が校勃然として興り世の文弱氣
 死の弊教を矯むるの木鐸たらんとす豈邦家の爲誠に慶す

べく賀すべきの至りならずや希くハ我校に生員たるの兄
妹よ爾來相提携し相補佐し以て今日開校の盛舉に背かざ
らんとを謹で祝す

女學校開業式

祝詞

貞正温雅ハ婦徳の純なり驕慢嫉妬ハ婦徳の褊なり古より
純良の婦徳を全ふする者鮮しとせど是れ性質の明敏に由
ると雖ども抑亦教育の端正に由るなり嗚呼教の以て已む
可からざる此の如し而して世の父母たる者其女に責むる

所のもの裁縫管絃に止むのみ是を以て聞見狹隘知識暗劣
にして夫あり内治の輔を爲す能ハざ子あり善良の教を爲
す能ハざる者職として教育の素なく讀書修身の何物たる
を知らざるに由るのみ今や我府此に見るあり新に女學校
を設け本日を以て開業の式を擧げられ爾來益々女教を盛
にし廣く女子の徳性を陶冶せられんとす妾等生徒亦此盛
典に列するの榮を得抃喜已むなし聊か蕪辭を陳べ以て今
日の祝詞となす

全

人男女の別あり乃ち剛柔性を異にす性に順て以て之を導

く是れ教育の要道たる所以なり今や國家文運勃興して教育の澤都鄙に洽く徳性を涵養し知識を研磨し駸々乎として將に盛を歐米に比せんとす誠に喜ぶべく賀すべきなり然るに私に怪む世の女子の稍高等學科を修むるもの往々其天稟の性を戕賊し柔順の徳貞淑の操は變じて悍傑放縱の行爲となり或は驕傲自負し猥りに以て先覺に擬し權利を唱へ自由を演し女にして女に非ず男にして男ならざるの一奇物と變性し教育は適以て其性を戕賊するの方となり卒に人をして女子は學なきの愈れるよ如かざるの歎を發せしむるに至る甚厭ふべく戒むべきなり茲に我府新に

□□女學校の設けあり大に女子の徳性知識を教養し以て他日主婦たり母たるの徳操を全からしめんとせらる妻等乏しきを以て幸に生徒の員に加はり本日開業の盛典は陪す希くは爾來日に月に切磋以て之に答へんとす謹て祝詞となす所なり

全

方今開明の隆運に際し天下所として學校の設けあらざるはなく行くとして咄嗟の聲を聞かざるはなし我府の如き曩きよ既よ無數小中學の設けあり而して未だ女兒として女子必需の藝術を學修せしめ純良の婦徳を涵養するの設

けあらざ茲に明治二十五年二月某日官更に□□女學校を
設け普く女生徒を募り以て府下一般女兒の徳性及び藝術
を教養せられんとす豈女子教育の爲賀せざる可けんや不
肖妾等幸に生徒の員に加り本日開校の式に與るを得歡喜
曰むなし希くは爾來黽勉以て斯の文の盛行を廣め以て女
教進歩の一助となさん此れ不肖輩の自ら期待し且以て今
日の祝辭となす所なり

生徒進級式

祝詞

茲に當校生徒編入証書授與の式を舉行せられ生等亦幸に
其席末に列するを得たり蓋し生等平素の孜々に因ると言
ふと雖ども孰ぞ知らん我が教官諸君の懇篤なる訓導の致
す所なるを豈感謝よ堪へざらんや伏て誓ふらくは爾來一
倍の勉強と忍耐とを加へ益々進て他日卒業の榮に齒せん
と茲に生員諸子に代り聊か腐辭を陳して祝辭を換ふ

全

天下凡百の事皆始あり而して後あらざるものなし人の學
術に於ける豈獨り然らざらんや縱令ば道を行くが如く然
り歩々進て止まざれば終に其志す所に到達するを得べき

なり然りと雖ども走れば躓き怠れば後る今や生等一步を進め一階を升る爾後益々勉め益々怠らざれば遂に其堂に上り其室に至るを得ん茲に進級の式場より列するを喜び一言以て本日の祝詞となす

全

明治二十五年三月某日茲よ本校各年級編入證書授與の盛式を擧げらる生等乏しきを以て亦其式末に列せ豈歡喜に堪へざらんや顧ふに是れ生等平素黽勉の結果なりと言ふと雖ども抑亦管理其宜しきを得陶冶其人を得たるに依らずんば何ぞ此幸榮に陪するを得んや嗚呼我が兄妹諸子よ

願くは爾來切磋日に求め拮据月に求め以て他日本校を卒業するの榮譽に副ひ以て我が師恩万々に酬いんと此に聊か感ざるあり卑言を陳ぬ祝辭となす

全

今や世運駿々日に月に歩一步を進め人誰れか學ばざるべき學ばざれば以て天賦の才能を暢發し以て文明の民たるを得ざればなり是の故に政府は夙に子女の教育に汲々せられ都となき鄙となき治く學校を設け以て就學せしむ蓋し是れ我が邦家の子女として他日郁文の民たるに愧ぢざるの國民を養成せられんが爲なり生等亦幸に此隆運に遭

遇し學に該校よりあり曩に既に學年試験を終へ本日編入證書の授與式に陪す生等の幸榮何ぞ之れに加へん茲に拙文を顧みず聊か述べて祝辭に代ふ

全

于時明治二十五年三月三十日本校學年試験既に終り茲に各級生徒編入證書授與の式を行はる生等乏しきを以て亦其席末に加はるを得何の幸榮か之に如かんや夫れ農に食む者は五風十雨其宜しきを得て而して後安し生等今日の盛典に列するを得るもの抑諸子黽勉の結果に依ると雖ども豈亦我が教官諸君の陶冶宜しきに非ざるなきを知らん

や此に諸子に代り聊る蕪辭を述べ以て祝詞に代ふ

全

茲に本校生徒進級證書授與式を舉行せらる抑生等幾十員幸に本日の榮譽に陪するを得るもの實に是れ我が親愛なる指導宜しきの致す所に非ざるはなし然り而して今や亦校長閣下を始め各教官貴下の懇切なる演説を拜聽し益々學問の必要なるを感ぜり希くは爾來益々勉強に拮据して生等の本分を盡さんとす不肖某進級生一同に代り鄙言以て答辭となす

全

惟ふよ生等初めて學ぶ此校に入るや未だ一丁の文字を辨
 せず況や忠孝信義の道に於てをや幸に我が教官諸君の示
 導薰陶其厚きを待ち且に學び夕に習ひ以て漸く第三期學
 年試業を了るを得たり而して今又生等の爲に此盛大なる
 證書授與式を擧げらる生等の光榮實に餘りありと謂ふべ
 し希くは夙夜に事に斯道に従ひ礪磨浸灌以て他日の大成
 を庶幾せざる可けんや謹て本日の證書授與式を祝す

生徒卒業式

祝詞

茲に和氣駿驥たる講堂に於て卒業證書授與の式を舉行せ
 られ併せて徳望ある校長閣下及び我親愛なる教官諸君の
 溢美なる賞辭と剴切なる懇諭とを蒙り生等七十の卒業生
 擧て其優渥なる恩義に感謝せざるはなし況んや父母の手
 に縋り來て學問に入りし昔日より普通の智徳を修め得し
 今日に至るの誠意訓導の鴻恩をや此に數年の長日月朝よ
 夕に相見相友たりし校舍几床を辭するに當り猶愛惜に堪
 へず況んや高教相聽き切磋相求めたる吾師吾友と袂を分
 つに於てをや謹て別辭を呈し併せて今日の盛典を祝すと
 爾り

全

快は事業を終へしより快なるはなく喜は成功を賞せられしより喜なるはなし嗚呼此快と喜と之を一時一身に承く豈其れ快事ならざや窓外梅花馥郁たる處訪ひ來る黃鳥愛音を弄す梅花黃鳥亦其れ之を賀せんとするも茲に明治二十五年三月卅日とトし本校卒業證書の授與式を擧げらる生等不肖を以て此盛場に列するを得る欣喜何ぞ堪へん然りと雖とも生等今日ある豈故なうして然らんや此に我が教官諸君の厚恩を謝し以て益々將來の進歩を計らんとす聊か蕪辭を陳し祝詞に代ふ

全

今や霜雪を凌ぎ風雨を忍びたる滿庭の草木は此春暖の好時を迎へ怡然として百花開くの時に際し生等亦滿堂の兄妹と共に多年切磋相求め夙夜精勵以て遂に此喜ぶべき祝すべき式場に列するを得たり諺より曰辛苦は快樂の種なりと嗚呼滿場の兄妹よ思ふに諸子は自今東に西に各其志す所を修むるならん只夫れ何くに學ぶも可なり數年提携拮据相求めし一袂を茲に分つ情何ぞ堪へん希くは我が教官諸君の鴻恩を肝銘し爾來益々旃を勉めよや恰好し庭園の梅花の風雪を凌ぎ以て今日馥郁として春風に薫るが如く

ならんとを聊か卑言を陳べ謹て祝す

全

今や文化日に進み都市寒村至る所學校の設けあらざるは
なし生等亦幸に此奎運の盛世に生れ我が親愛なる教官諸
君の薰陶は終に乏しき生等として今日卒業證書受領の榮
譽を得せしめらる何の喜か之に如かん願くは爾今以後尙
一倍の黽勉を加へ各自亦其志す所の業務を修め他日志成
り世に處むるの日は進て邦家の爲万一の力を致し以て我
が教官貴下の厚恩に答へんとす此に卒業生總員に代とし
て一言以て祝詞となす

全

卒業女生徒の總代として不肖□□拜答す思ひ廻らせば母
の手にすがりて當校に入學してより朝な夕なよ師の許に
侍りてもの言ふすべ身の行ひ讀み書きのわざ其他何くれ
といとゞ恩愛深き我が師の手に數多の朋友と親しく教へ
を受けつるもいつしかに四ついふ星霜の經り行きて今は
やうく一通りの業を覺はりて卒業式と云ふ嬉しき場所
に侍るを得尙も重ねくの御教訓いかでる忘れ申すべき
さはいへこし方親みし師友の情思へば心曳かるゝ今日の
名残り嗚呼我が恩愛なる諸先生よ大人よ又此に居并ひた

まふ我が父母よ兄弟よ只この上は師の教導を誓ひ守りて
尙もますます勉勵せんされば別れ申なん

全

生等乏しきを以て學に此校に在る既も數年日月梭の如く
白駒隙を過ぐるが如し今や大試験已に了り本日と以て卒
業證書を授與せらる回顧れば生等初めて本校に入學す
るの當時や眼に一丁の字なく身に一技の能かりしに師
の親切なる多年の陶冶に依り茲に本日の盛式に參列する
を得るもの豈其鴻恩の深き如何が鳴謝すべき願くは日夜
黽勉他日世に立ち事に當るの日幾分の國益を計り幾分の

國光を添へ以て聊か之に答ふる所あらんとす腐言以て祝
辭に換ふ

全

茲に本校四年級生徒卒業證書授與の式を擧げらる預る者
六十余人是れ實に我が教官平素の薰陶と諸君が夙夜黽勉
の良果に非ざして何ぞや豈慶せざる可けんや豈賀せざる
可けんや然りと雖とも學途の究りなき愈進めば愈遠く益
々行けば益々廣し望むらくは生等諸君と尙相共に提携し
以て更に高等の學科を修め而して他日國家の福利を進む
る所あらんとす聊も卑言を述べ以て我が教官貴下に謝し

併せて本日の盛典を祝す

全

盛なる哉文學の道偉ある哉教育の功今文化日に行えれ教化月に隆にして農に商に吏に工に學なくんば以て一日も其業を保安する能はざると猶草木の培養に於けるが如きなり是を以て本府曩に小學教育を奨励せられ我校亦既に數回の卒業生を出せに至る而して今や又本日を以て卒業證書授與の式を舉行せらる是れ實に我が親愛なる校長及び教官諸君の陶冶其宜しきを得たるに非ずんば焉ぞ能く此の如きに至らんや不肖生等幸に亦其席末に列せざるを得

聊か鄙辭を陳し祝詞となせ

學藝獎勵會授賞式

答辭

謹て社會の變遷を惟みるに或は滔々長足の進歩を現はし或は澁滯却て退歩を爲せものあり是れ一え天變地異に因ると雖とも要するに國人の遊惰安逸に流れ以て競争の念慮を失ふもの多き居るハ之を史乘に徴して明かなり是に因て之を考ふれば競争心の社會進歩上に必要なこと亦疑ひを容れざるなり茲に當校本月某日を以て學藝獎勵

會くわいを開ひらかれ生等短才拙劣たんさいじつりやうを顧かへみず敢て員末いんまつに加くわはり驚鈍おどろ鈍と盡つくすと雖なども事輕卒ことけいそつに属ぞくし成績意せいせきいの如ごとくならざ實じつに慚はな汗背あせせを沾つるせり今日圖けふとらざりき万まん一いつの僥倖やうしやうを以もつて選末せんまつに列れつするとを得えんとは欣歡殆きんくわんたいていんど措まく處ところを知らず聊なほか腐辭ふじを陳ちんぬ出品者しゅつひんしや一同いどうに代かり謹まことて答辭たうじを奉ほうず

全

茲こゝに當學藝獎勵會たうがくげいれんかい了りりと告つげ其褒賞授與式ほしょうじゆゑしきを舉あげらる不肖生等ふせうせいどう幸さいはひに當撰たうせんに尾おたるを得え感喜かんきの至いたりに堪たへざ惟ただふに生等せいどうの鈍才拙劣どんさいじつりやうなる本校多年ほんがうたふねんの懇切こんせつなる陶冶たうぎを待まちずして安やすぞ能よく茲こゝに至いたらんや謹まことて受賞者じゆゑしや總員そうゐんに代かて祝辭しゆくごを呈ていし

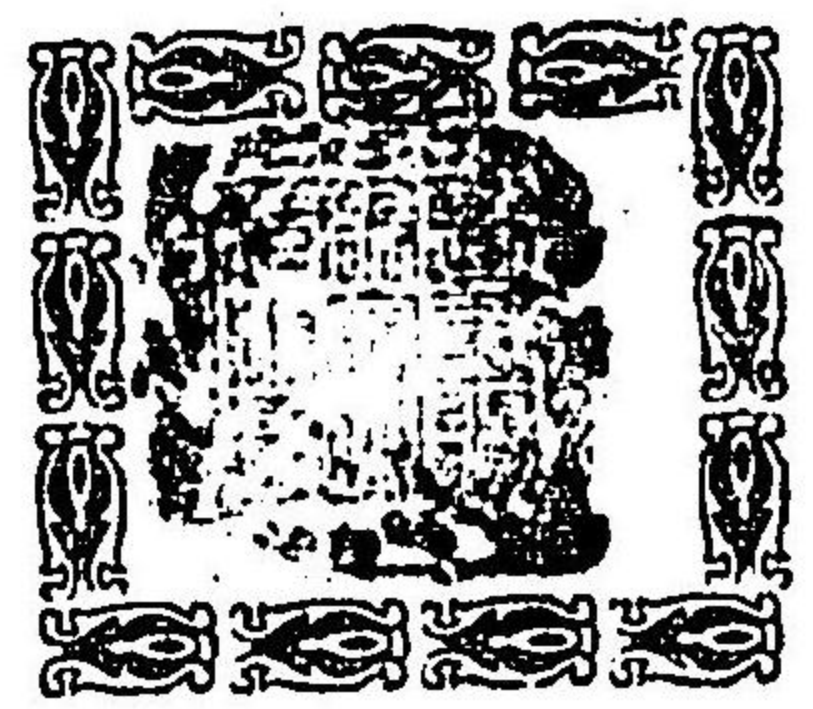
併あせて次回じかいに於おて一層いっしやうの進歩しんぷあるべきとを期もちす

全

我わが校がうこたび我れ等生徒われらせいとの爲ために學藝獎勵會がくげいれんかいてふものを設たけられしにぞいさゝか學まなび覺おぼぬしものを出だせしに幸さいはひにも撰舉せんきよを辱はたしけうして茲こゝに賞與しょうゐの榮はを蒙あり我れら生徒われらせいとの面目めんぼくはたとへんにものなしこひねがはくは爾來なんらい益々いさゝか勵まなみ學まなびて今日本會こんにっぽんかいの恩賞おんしょうにそむいざらんことを誓ちかふ

生徒大祭祝日説明 終
心讀

版 權 所 有



明治二十五年六月廿四日 印刷
明治二十五年六月廿七日 出版

定價拾錢

大阪西區江戶堀下通葺丁目百十二番邸

著 者 山 根 丑 藏

大阪市東區北久太郎町四丁目番外一番屋敷

發行者 圖書出版會社

代表者 梅原忠藏

版權登錄

市東區德井町二丁目六十八番屋敷

印刷者 前野茂久次

大阪市東區北久太郎町心齋橋西五入

發兌書肆 圖書出版會社

特別大賣所

備後福山 全 深津 全 尾道久保町 全 安藝廣島 全 西横町 全 忠海 全 周防岩國 全 山口 全 長門船木 全 赤間ヶ關 全 山口中市町 全 出雲松江 伯耆米子 因州鳥取上魚町 全 大工町 全 讚岐琴平 全 丸龜 全 高松 全 伊豫松山 全 西條神拜村 全 土佐高知 全 紀州和歌山 全 筑前博多

原田治四助 藤井保兵衛 兒玉庫三郎 清水藤助 友村善三郎 松上三郎 田村善三郎 白川伊兵衛 宮田新吉 生田新吉 山名松次郎 小原塞翁 川原兼清 今井兼清 横山安次郎 山本吉太 山本吉太 笠田儀三郎 笠田儀三郎 宮脇仲次郎 向井藏次郎 世羅織次郎 金川支店 澤本支店 山中支店 平井支店 林井支店 高田支店

菊竹幸儀 小柳幸次郎 赤司平次 河内莊平 書籍會社 西村常勝 鶴野常勝 小野倉三太 安中三太 五長川信 長崎源次郎 齋藤源次郎 長山喜三郎 川島喜三郎 齋藤喜三郎 永井勝太郎 芹川勝太郎 石原知平 浦田伊平 澤田幸兵衛 吉田幸兵衛 三浦吉郎 山川庄三郎 山川庄三郎 甲斐治平 倉成惣二郎 對州原今屋敷町 登岐郷之浦

三重縣尋常中學校長清水職善君序文
帝國文科大學教授 內藤耻叟君跋文
三重縣尋常中學校 岡島安平君謹述

教員勸語問答

勸語全文朱印刷附●上等洋紙印刷鮮明洋裝美本全一冊●特別正價金拾錢郵稅貳錢
昨明治廿三年下賜ふ所乃教育勸語は簡易にして聖意の在る所深遠にて何人にも容易く之を窺ふ能はる所況んや淺學少年の輩よ於てかや故に此勸語を解したる書も多しと雖も普通の本書は一字一語に到底其意を通達するを得ず故に本書の一字一語を就て問を起し之に答へたるもの多し其問答の方法は著者朝夕教授の際徒亦疑義を質したるを講述し質義せし所の生者宛め一書と爲したるものにして此勸語の聖旨の在る所を知るを此書が如くものなし而して此勸語は小學生徒の必を讀まざる可からざるものなれば奨勵品に一部を與へらるるには適當の書なるべきなり

飯尾千尋先生著

小兒立志美談

挿畫拾個及口書入印刷鮮明洋裝美本全一冊●今般特別正價金拾貳錢郵稅四錢
本書は貧賤より起つて天下を經綸するの英雄豪傑となり或は一商家の奴僕より出て豪商紳士となつて天下の財政を左右し或は辛苦經營して世に偉功を立て大益を興へたる發明家等古今著名なる者の小兒の時に爲したる事蹟を輯めたる書にして一讀以て驚歎感激せしめ小兒たる者の立志の基と爲そ其文章は至極平易にして訓解を施し處々に圖を寫し之を實地に觀せしむる如く實に小兒たる者の金科玉條たるの書なり是に於て乎本書發兌以來日尙は淺しと雖も既に數千部を賣盡し今又再版の期を見るに至れり而して本書は學校教授の參考書となし學力優等の者に賞與品とするに至極適當の良書なり

三宅 弘先生著

日本歴史美談

●挿畫數十個入●上等洋紙印刷鮮明洋裝美
●本全一冊●特別正價金拾貳錢●郵稅四錢
我邦も生息して我邦の歴史を知らざるは實も
耻づべき事なり況や各國の歴史を知るべき乃
今日に於てあや本書は我邦の歴史を小學生徒
等に讀ましめんを欲し極く了解し易く上古よ
り今の明治聖世に至る迄を簡短にして明瞭に
解き生徒等をして一讀以て治乱興亡、年代、系
統、政權、等の事蹟を知らしめ其間著名なる戰
亂、治蹟、進歩、沿革、等は其人及び事蹟を詳に
記し加ふるに圖を挿み當時の状況を示したる
書にして實に小學生徒等の讀むべき歴史とは
此書を謂ふべき也故に本書は學校に備へ教授
の參考とし又生徒の獎勵品に適當なる良書な
り請ふ速かき求めて其の有益なるを知り賜へ

篠田正作先生著

家庭女子立志美談 全一冊

●美術挿畫及挿畫數十個入●印刷鮮明表裝美麗上等製本
●正價金十二錢●郵稅金四錢

此書は家庭教育の基本となさんため女子生徒の心得より女子
たる者の道を説明し頭書には淑女の行状を輯めたる書なれば
女子たる者の金科玉條たるの書なり依て左に目錄を掲載す
本書目次 ●女子の行ひの事●結婚の事●婚約の事●婚
容の事●婚功の事●配偶を擇ぶ事●夫に事ぶ
る要領●舅姑に事ふる要領●小姑并に親族に交はる要領●婚
約の事●婚中の心得●出産の心得●産後の心得●兒を育つ
る心得●禮式の事●親縁の事●洗濯の事●祭祀の事●奉公人
を使ふ心得●化粧の事●習病の心得

頭書目次

●孝女みどり●盲女●貧居廣助の三妹●孝女も
の孝貞●長門の賢婦●貞婦さよ●あゝ女の貞烈●梅屋の女●
山名禪高の妻つる女の貞操●孝婦りゑ●秋田重信の女●孝女
そめ●孝女とも●いゝ女の孝貞●はる女の婦徳●貞婦たよ●
さん女の孝貞●孝婦いと●農夫忠五郎の妻●いぢ女の徳情●
はつ女の孝貞●賢母るり

金谷可美男君著

教育経済美談

●挿畫數十個入●上等洋紙印刷鮮明洋裝美
●本全一冊●特別正價金拾貳錢●郵稅四錢
本書は小年易き極くたやすき文字に
て經濟の事を説きたるものにして先づ初めに
經濟の大要を説き經濟とは如何なることぢや
か解ばならぬ渡世學問なることを明にし次に
古今經濟を以て一身の出世を爲したる人の事
柄を數百人輯めて其實例を示す書にして經濟
の面白き話を讀む間に自然と經濟の道を知り
得るも乃ち今日に於ては最も此書物の中に小
年に經濟の事を教ふるには最も此書物の中に小
なり又其間へ挿む奇麗なる挿畫數十個を以
てしたれば今日まで經濟を教ふる身分乃貴賤
便益なる書は一冊も見ざる所なり身分乃貴賤
と男女とを問はせ實に讀まざるへからざる書
なり又小學校の生徒に獎勵品として與ふるに
は適當なる良書なり

永松乙一君著

少年教育美談

●石版美書及び挿畫數十個入印刷鮮明洋裝
●美本全一冊●特別正價金拾貳錢郵稅四錢
方今諸學校に於ては德育を主とし修身を第一
として教授するに至れり是に於てか修身に係
る書陸續發見すと雖も或は高尚な或は事蹟の
冗長なる小年に教授するも小年自から之を
讀むも誠に解し難くして文の長きに倦み適當
の書たるを見せ本書は専ら學校に於て生徒に
向ひ修身の美談を爲すの用に供せんと欲し文
簡短に事蹟は其要を摘み教ふるに便に自から
讀みて曉り易きを謀り至極平易に書きたるも
のなれば小學校又は最も適當の書なり且つ本
書乃如きは品行方正學力優等の生徒に賞與品
とするに供せんと欲して体裁を美麗にし廉價
を以て主とす請ふ宜く一讀して其趣旨にわら
ざるを知り賜へ

河合東涯先生著



●挿畫數個及勸語入●印刷鮮明洋裝美本
 ●全一冊●特別正價金拾貳錢●郵稅金四錢
 本書は明治廿三年下賜所の教育勸語及一字一句毎に俗話に註解を加へ小學生徒をして望意のある所の辱きを知らしめんと欲す之に加ふるに古今の忠孝節婦博愛仁慈義勇の著しき者の事蹟を其の聖旨のある所に掲げて其一例を示し且つ圖を挿み一讀して曉り易からむ抑も此勸語のかしこ之辱き我等臣民は固より父兄たる者能く其子に示して聖旨を奉體せしめざるへからず故に生徒たるものは必ず一部を備へて誦讀暗記せしめしめて生徒と雖を一々之を購讀するに至らざる情状あるを以て宜しく品行方正學力優等の生を賞與品せして普く讀ましむべし

男柴田武修大人間書



●紙數三百二十頁●上等洋紙印刷鮮明●洋裝
 ●全一冊●特別正價金貳十錢●郵稅金六錢
 凡そ人たるものれ自分の身を脩むるが肝要であります其の身没脩をまするには道話を聽た先づ人たる者は常に行はねばならぬ人倫五常の道を知らねばなりませぬ本書は即ち鳩翁道人が五常の道を茶飲み話をする様よ至極俗談又話したる道話を記載したる書にして老幼婦女も了解のできぬとはありませぬ本乃製は美麗よまて實に修身の心掛ある人には欠をべからざる書なり

三宅 鼎先生著



●紙數四百廿頁●文章作法及ヒ石版刷勸語入
 ●洋裝頗美●特別正價金廿八錢●郵稅金八錢
 本書は高等小學校及中師範學校生徒其他初學者の作文を習ふの便益を供せんと欲して其順序階梯を正し文章は至極流暢にして而して當時に適切なる新奇の熟語を用ひて其作例の如きも古文を載せず當今の文章家の作りたるものを輯め其間編者の著作として題の新奇なるものを加へ殆んど千題を記し數種の部門に分ち必要の例題として之をあらざるはなし且つ從頭には和文の作方例題等を掲げたる書にして從來世に出版しある多くの書中にて斟酌折衷して最も適切最も新機軸を出したる書あり讀者宜しと人智は日進み後者は必ず前書に優る事を了察し賜ひて速かに購讀せられよ

藤原懋君著述



●紙數四百六十頁●特別正價廿五錢●郵稅八錢
 ●洋裝美本全一冊●正價廿五錢●郵稅八錢
 近來立志編ノ書多シト雖モ其記載スル所ハ傳記ノ要素トナラザルモノ多シ所謂獨活ノ大本ニシテ世人ハ之ヲ讀ムモ何等ノ感情ヲ起スコトナシ名實相反スルノ書ナリト謂フベキナリ抑モ志ヲ立ツルヤ假令一言一事ニテモ其言明確ニシテ其事實ノ偉大ナルモノハ立志ノ要素トナルニ足ルベシ本書ハ茲ニ見ル所アリテ近來ノ偉人傑士ノ言行事蹟中人ヲシテ一續以テ感憤激勵志ヲ立テズンバアル可カラザルノ事蹟ヲ無慮二百餘名ヲ集メテ政治者醫師代言記者農工商等ノ都門ニ分チ行文ヲ流暢ニシテ頗ル其ノ意ヲ取ニ易シ而シテ亦且立論ヲ精確ニシ青年諸士ノ殷鑑模範トナリ且ツ文範トナル可キ書ナリ本書ハ既ニ發兌セシタリテ請フ各地ノ書肆ニ就テ購讀セラルレ此廣告ノ經言ニアラザルヲ知リ賜ヘ

函館私立幼稚園主武藤やち女序文
岡本可亭君著述

●高等新體婦女用文

●紙數四百卅頁余 ●美術畫挿入印刷鮮明洋裝

●頗美本 ●今般 金廿五錢 郵便稅
全一冊 ●特別 金八錢

從來婦女用文章の舊多しと雖も唯だ其一端を記しざるのみよして未だ完全なる書を見ず本書は岡本可亭先生時日と腦髓を費し其學ふへき順序楷梯を整へ淺きより深きに入るの法を編し先生得意の筆を以て其文章の巧妙なる文明世界の婦女に適當し加ふるに整頭に和語略解、冠辭略解、假名遣、送り假名、百人一首、近世才藻、女大學其他凡て婦女文學に必要なるものを掲げ實に婦女たる者座右に備へざるべからざる書也

廣島縣尋常中學校教頭太田義弼校閱
廣島縣高等小學校訓導松田直一編纂

●小學校用日本歷史讀本

●洋裝全書冊正價金六錢郵稅二錢

本書ハ高等小學校歷史科學年配當表ニ據リ歴史ノ思想ヲ起サシメシメガ爲メ著名ニシテ解シ易キモノヲ編纂シ一學級生徒ヲ教授スルノ教案ナリ且ツ編纂ノ体裁年代ノ順序ヲ逐ヒ事實ノ關係ニヨリ觀念ヲ誘導シ且記憶ニ便ナラシムルヲ主トセシ教科用參考ノ良書ナリ

圖書出版會社編纂

●家庭幼年文庫

●教育 幼年文庫 正價八錢郵稅四錢

●家庭小學生徒

●教育 小學生徒 正價八錢郵稅四錢

●女子老嫗物語

●家訓 老嫗物語 正價八錢郵稅二錢

和田晴耕君著

製本既成

實地 帝國實業新用文

全一冊

紙數六百五十頁

洋裝頗美本

●特別正價金三十拾錢

●郵便稅 金拾錢

●石版密畫及 木版細圖 挿入

●拾部以上御 注文ハ一割引

近來實業家に必要なるもの、如く廣告して發兌する書ありと雖も其書を見るに首と末て日用普通文を記載し其他は無益に屬する事項を輯め且つ用文章の如きも其文例の粗漏なる到底摸範とするに足らざるもの多し商業家の手簡文の如きは尤簡明にして能く其意を通し所謂掛引は此又在り一字一語を注意して書かされは尤大なる損害を被ひることあり何ぞ粗漏誤謬のものを以て作例と爲すことを得んや况んや人智の日に進歩し實業の益々隆盛に赴くの今日に於ておや本書茲に見る所あり先づ實業家の日用往復文を始めとし之を農商工の三門に分ち簡明にして卑俗に涉らざる高尙に流れず優勝劣敗活潑機敏の今日の實業家社會に適當する作例を掲ぐ而して本書用文章を以て主とするにあらず凡そ實業家に必要の事項は洩らさず記載せんと欲し法律諸規則より商家の機密農家の心得工業家の秘術其他銀行諸會社郵便、鐵道、電信、等廣く網羅し尽して遺さず實業に未だ世に比類を見ざる所の書なり實業家諸君本書を座右に備へ玉は、如何なる事を知るにも之を搜るに従つて出で實業家の節用集と云ふべきものなり請ふ速かに一本を購し賜へ

●●●一大有益の良書發兌の廣告●●●
文學士梅本順三郎君序 柴垣穰著

學術
金言
語言

金諺一萬集

堅牢製本 全登冊
脊皮金字入顔美裝
携帶の便利を計り製本
体裁横四寸縦五寸

●紙數五百頁●今般特別正價金四拾錢郵稅八錢●製本既成發賣す
凡万卷の書を讀むと雖も其要を得されは徒らに通過したるものにして之を實際に行ふ
こと能はず古人の所謂學問の道他なし放心を求むるのみと云ふの趣旨に背き何を其効
益わらんや金言とは書中の主眼たる要語にして之を讀むときは一々其書を涉獵すると
効力を均ふとするものなり故に僅に一句一言と雖も或は智育徳育學術實業立志の要素と
なり實に學問の捷徑と云ふへし加之ならず文章と詩作と演説に之を材料として適切な
るもの也方今世に其書なきにわらずと雖も其集むる所のもの多くは了解し難くして其
語句の要を知る能はず本書は柴垣氏自ら万卷の書を讀み金言たるへたものを録し積ん
で數万に至る之を學術、金言、鄙語、譬言の四門に分ち其言句たる一も無益に属するも
のなく實に完全無比の金言集なり乃ち文學士梅本順三郎氏の序文を請ひ出版す請ふ迄
かに購讀めらんを

出版發兌所

大阪市東區北久太郎町
四丁目番外一番屋敷

圖書出版會社

工 2 X 23



[Redacted]

特 21

818

014350-000-7

特 21-818

大祭祝日説明（生徒必携）

山根 丑蔵（秋里）／著

M25

ABB-0701

